

〈授業改善推進プラン 令和6年度第1学年 国語科〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現する上で解決すべき課題 ○「正しく書く」「正しく読む」「伝わる声で話す」「目を見て聞く」という基礎的、基本的な力を確実に身に付けさせる。 - 鉛筆の持ち方、字を書く時の姿勢、書き順など丁寧に最後まで粘り強く取り組む学び方を習慣化させ、学びの方の土台を形成する。 - 言葉の意味や使い方を知り、言葉をまとまりとして捉え、音読する力や表現する力を伸ばす。 - 促音、拗音、助詞「は」「を」「へ」を正しく活用する知識、技能を身に付け、正しい文章を書ける力を付ける。	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和4年度授業改善推進プラン記載内容 - 記載なし (2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現するための工夫等 【基礎基本が必要な児童】 - 適宜、鉛筆の持ち方、姿勢、書き順、話し方、聞き方、言葉の使い方等、学習の基礎を習慣化させる。 - 読み聞かせの読書活動を設け、言葉に興味をもたせ、語彙を増やしていく。 - 毎日、音読を家庭学習に取り入れて音読指導を習慣化し、言葉のまとまりとして捉えられるように、単語を○で囲ったり、線を引いたりして言葉として読める力を付ける。 - ペア学習を多く設け、話し方聞き方の型を掲示し、自分の言葉で話す練習を繰り返す。 - いろいろな文の型を提示し、書く経験を多く設け、書くことに慣れさせる。 【活用が必要な児童】 - 読書活動を設け、一人読みができる習慣を付ける。語句のまとまりや関係について興味をもたせ、身近なこと以外にも生活の中で活用できる語彙を増やしていく。 - 毎日、音読を家庭学習に取り入れて、音読カードを活用した音読指導を習慣化し、文章のまとまりを捉え、正しい口形、発声、間の取り方を身に付けさせる。 - グループ学習、全体での発表の場を多く設け、正しく言語を使い、自分の言葉で表現する力や聞く力を育む。 - ミニ日記や学習の振り返り等、書く経験を多く設け、自分の思いや考えを書いて表現する力を付ける。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 ＜方策＞ ①鉛筆の持ち方、姿勢、話し方、聞き方の掲示や語彙を増やすための文字に関わる学習環境を意図的に整える。 ②学習の導入やスキルタイムを使い、言葉の適切な使い方や文章の書き方、促音、拗音、助詞の定着を図る。	＜検証方法＞ ①学習の始まりでの毎時間の声掛け、ペアでの確認、をし、徐々に声掛けや確認の回数を徐々に減らす。8割が習慣化したのが見られる場合、声掛け、確認の回数調整をしていく。 ②週1回の日記や木曜日のスキルタイでのミニテストを細かめに設定し、書く力や語彙の定着を確認する。振り返りを文章で8割の児童が表現できるように、毎単元、書いてまとめさせる。
4. 検証結果(成果と課題) 【年度末に記入する】 ＜成果＞ - 基本的な学習への姿勢は身に付いた。 - 学習の導入時にしりとりタイムを設定したり、新出漢字の学習時には、関連する語彙に触れさせたりする時間を多く設け、言葉を読む、書く力がついた。 - 振り返りを具体的に書く練習を繰り返し行い、文章への抵抗はなく、書くことができるようになった。 ＜課題＞ - 促音、拗音、助詞の使い方、見直しの仕方は繰り返し練習が必要である。 - 具体的に自分の気持ちを言葉で表現する力が弱い。	5. 令和7年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項【年度末に記入する】 「いつ、どこで、だれが、なにを、どうした」＋自分の思ったこと、考えたことを具体的に文章で書く練習が必要である。 - 促音、拗音、助詞などの誤字、脱字が見られる。引き続き練習し、習熟をさせる。 特に、小さい「つ」「～わ」→「～は」 - 文章を書いた後に見直す習慣づけを継続する。 - 言葉の意味を捉えて書く練習をし、語彙を増やす。
6. 令和7年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿【年度末に記入する】 正しい言葉を使い、自分の考えや思いを自分の言葉で表現できる児童	

【別紙 2】

〈授業改善推進プラン 令和 6 年度第 1 学年 算数科〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現する上で解決すべき課題 ・ 10 までの数の合成や分解の理解の習熟、定着をさせる。 ・ 文章問題の読み取り、数量の関係に着目して立式する力を付ける。 ・ 書いたら、見直しをする習慣化を図る。	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和 4 年度授業改善推進プラン記載内容 ・ 記載なし (2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現するための工夫等 【基礎基本が必要な児童】 ・ ブロックやおはじきを使い、具体的操作を取り入れ、数の合成、分解を繰り返し行い、数の感覚を養う。 ・ 文章問題の中で、「わかっていること」「聞いていること」に赤・青線を引き、問題文を整理する。 【活用が必要な児童】 ・ 問題文を図で表し、問題場面を具体的にイメージさせる活動を意図的に多く取り入れ、思考の過程を表現できる力を付ける。 ・ 文章問題の中で「わかっていること」「聞いていること」算数的言葉のキーワードに着目する習慣を付けさせ、問題文に取り組む力を付ける。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 ＜方策＞ ①数の概念を定着させる。計算の習熟ができるように反復学習を行い、基礎的な定着を図る。 ②思考の過程が分かるように考え方や計算の仕方を半具体物や図、言葉を使ってノートにまとめて表現する場を多く設ける。	＜検証方法＞ ①学習の始めに、1 分間チャレンジタイムを設定し、数の合成、分解やたし算、ひき算など問題カードに取り組み記録をしていく。単元終わりまでには、正答率 8 割を目指す。 ②自分の考えを書く練習を繰り返し行い、定着を図る。ペア学習を取り入れ、図や言葉で立式の根拠を示して説明をさせる。毎授業、ノートを確認し、習熟度を検証する。
4. 検証結果(成果と課題) <u>【年度末に記入する】</u> ＜成果＞ ・ 毎時間の 1 分間チャレンジを繰り返し、10 の分解、合成を理解し、次単元への学習にも活かすことができた。 ・ 図から図と言葉と考え方をまとめる練習を計画的に取り組み、自分の考えを表現し、まとめる習慣がついた。 ＜課題＞ ・ 文章問題を読み取る時に、問題文に出てきた数字の順番に立式することがある。文章を読み取る練習が必要である。	5. 令和 7 年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項 <u>【年度末に記入する】</u> ・ 指を使用しながら計算する児童もいる。継続して計算に慣れさせる。 ・ 文章問題を読み取る力をつける。 「わかっていること」「聞いていること」は、引き続き線を引いて確認をする。また、足し算なのか引き算なのかキーワードになる言葉を見付けられるようにする。 ・ 見直しの仕方を確認し、習慣づけを継続する。
6. 令和 7 年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿 <u>【年度末に記入する】</u> ・ 場面を想像しながら文章を最後まで読み取り、ねばり強く考えることができる児童	

【別紙2】

〈授業改善推進プラン 令和6年度第1学年 生活科〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業を実現する上で解決すべき課題 ・生活経験の不足、日常生活に必要な基本的な技術が十分でない児童が見られる。 ・観察する時の着眼点、観察の仕方がわからず、気付いたことを絵や文章で表現する力に個人差がある。	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和4年度授業改善推進プラン記載内容 ・記載なし (2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業を実現するための工夫等 ・気付いたことのキーワードとなる語彙を全体で確認してから、自分の言葉で具体的にまとめていくようにする。 ・観察や活動の視点を明確に示し、新たな気付きにつながるようにする。 ・観察カードなどから友達の考えやまとめ方を視覚的に捉えられるように常時掲示し、表現の方法の幅を広げさせる。 ・日常生活に必要な基本的な技能が身に付くように、計画的に練習する機会を設け、技能の習得をする。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 ＜方策＞ ① 内容や時間の見通しをもちながら、児童の生活や体験に基づいた具体的な活動を行う。 ② 変化した様子を見とる着眼点について、繰り返し指導し、文章や絵での表現する方法の手法を提示しながら指導する。	＜検証方法＞ ① 「手や体を使う活動」「様々な道具を使う活動」をたくさん取り入れ、生活上必要な技能を身に付けさせる。できたかなタイムを設定し確認する。9割の定着を目指す。 ② 観察の5つのポイントを掲示する。「見付ける、比べる、例える」など具体的な視点を与えて観察カードに取り組みさせる。交流できる場を設け、新たな気付きへ繋いでいけるようにする。8割の児童が5つのポイントの習得と活用できるように目指す。
4. 検証結果(成果と課題) <u>【年度末に記入する】</u> ＜成果＞ ・「見る」「触る」「聞く」「感じる」「考える」を多く経験し、考える力をつけた。 ・1つの植物を継続して観察することで、観察するポイントを示し、変化を絵や文で表現することができるようになった。 ＜課題＞ ・観察したことを言葉で表現することが難しい児童がいる。表現の仕方や観察のポイントをおさえた練習を継続してする必要がある。	5. 令和7年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項 <u>【年度末に記入する】</u> ・観察する視点や変化した様子を見とる着眼点について、繰り返し指導し、より具体的に文章や絵で表現する力をつける。 ・観察の記録としてタブレット活用も効果的である。
6. 令和7年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿 <u>【年度末に記入する】</u> ・自分の周りの自然や事象に興味を示し、比較して観察ができたり、違いに気付いたりする児童	

〈授業改善推進プラン 令和6年度第1学年 音楽科〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業を実現する上で解決すべき課題 ・個別の活動や一斉指導だけでは「わかった」「できた」という実感が少なく、学習意欲が向上しない傾向がある。 ・音楽科の学習では、児童の音楽活動と離れた個別の知識の習得や、技能の機械的な訓練に偏ってしまう傾向がある。音楽活動と関わらせながら知識や技能を習得することで「わかった」と実感したり、児童が主体的に学び、思考・判断・表現することで「できた」と感じたりすることができるようにする必要がある。 ・拍感覚の習得速度やリズム打ちの技能に個人間で差が見られるため、丁寧な個別指導が必要である。 ・就学前の音楽体験に差があり、基礎的な歌唱に必要な音程感覚の習得が十分でない児童が見られる。	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和4年度授業改善推進プラン記載内容 ・記載なし (2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業を実現するための工夫等 【基礎基本が必要な児童】 ・個別に表現の技能を見取る機会を適宜設け、学習内容の達成状況を把握するとともに、その場でフィードバックを行い、児童が達成度や学びの方向を理解できるようにする。 ・旋律のフレーズを取り出して範唱と模唱を繰り返し、歌唱の技能について丁寧に指導する。 【活用が必要な児童】 ・表現活動の試行回数を増やし、曲想を感じ取って表現を工夫できるようにする。 ・わらべ歌に取り組んだり、拍にのって体を揺らしたりするなど、身体表現の活動を多く取り入れ、拍感覚の育成や意欲の向上を図る。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 ＜方策＞ ①拍感覚と音高感覚の定着を図る。範唱と模唱を繰り返す活動を増やし、演奏聴取をその後の指導に生かす。 ②絶え間ない表現活動や身体表現などを通して表現の試行の質と量を確保し、表現に対する思いをもてるようにする。	＜検証方法＞ ①個別または少人数の演奏聴取によって児童の歌唱技能の達成度や課題を細かく記録し、指導を検証する。5割の児童が適切なリズムと音程で歌えることを目指す。 ②児童の発言を記録し変容を明確にし、指導を検証する。5割の児童が曲想を感じ取って表現を工夫できるようにする。
4. 検証結果(成果と課題) <u>【年度末に記入する】</u> ＜成果＞ ・模範歌唱や鍵盤楽器の音に合わせて、正しい拍や音高で歌う力が約7割の児童に身に付いた。 ・「楽しい雰囲気」を想像しながら、明るい声で歌う力が身に付いた。 ＜課題＞ ・友達の音や声を聴いて、お互いに音を合わせる技能に課題がある。	5. 令和7年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項 <u>【年度末に記入する】</u> ・新出の曲を歌う際は、2小節ごとに模範演奏を示しながら歌い、音高やリズムを確かめながら覚えることができるようにする。 ・音価の長い音や裏拍を含むリズムを捉えるのに時間がかかる傾向がある。手を叩いたり足踏みをしたりにして、拍を感じながら歌うことができるよう指導する。
6. 令和7年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿 <u>【年度末に記入する】</u> ・音楽活動を楽しみながら、表現への思いや意図をもつことのできる児童。	

【別紙2】

〈授業改善推進プラン 令和6年度第1学年 図画工作科〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現する上で解決すべき課題 ・図画工作科の特に多くの道具や材料を使用する。1年生は初めて学校で使用する道具も多いため、技能に重きをおいた単元を適宜行い、1つ1つの道具や材料の扱い方を丁寧に学び、基礎的な技能の力を高める。 ・自分で考えたり、感じたりして豊かに表現や工夫する力をさらに高める。 ・様々な発想の方法をできるように発想する力をさらに高める。	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和4年度授業改善推進プラン記載内容 ・記載なし (2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現するための工夫等 ・基本的な材料や道具などの使い方を掲示や ICT を活用して確認するとともに、様々な学習場面で何度も活用できるようにする。 ・表したいものを見付けるための様々なアプローチを経験できるようにする。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 ＜方策＞ ①掲示や ICT 機器を活用しての材料や道具の使い方を説明するとともに、様々な道具や材料に何度も触れる機会を増やす。 ②表したいものを見付けるための様々なアプローチを経験できるように導入の中でねらいを明確にして伝えることにより意識させる。	＜検証方法＞ ①児童や作品の観察。全児童が材料や道具を正しく扱え、どんな小さな工夫でも良いので自分なりの工夫をできるようにする。 1学期の間にはさみ、のり、ねんどなどの基本的な道具や材料を正しく扱えるように指導する。 ②児童や作品の観察。毎回の授業でねらいに沿った活動が行われている。
4. 検証結果(成果と課題) 【年度末に記入する】 ＜成果＞ ①掲示や ICT を活用したことにより児童の理解がスムーズになった。また、掲示があることによって説明を何度も見返すことができ、理解が深まった。 ②導入時でねらいを明確化し、児童の意欲づけに繋がった。 ＜課題＞ ・ICTの接続が安定しないときがある。 ・ねらいにそった活動が難しい児童がいる。伝え方や児童の意識づけに工夫が必要か。	5. 令和7年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項【年度末に記入する】 ・道具の扱いに課題がある児童がいる。のりでの接着やハサミで紐を切る際の力加減など、再度復習が必要。
6. 令和7年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿【年度末に記入する】 様々な材料や技法に興味を持ち、活動を楽しみ、友達の作品の良さを認めることのできる児童。	

【別紙2】

〈授業改善推進プラン 令和6年度第1学年 体育科〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現する上で解決すべき課題 - 基本的な動きや遊びの経験に個人差があり、運動遊びやゲームなどを行うために必要な技能や体の使い方を身に付ける。 - 教え合う場、互いの良い所をまねっこしながら動きを習得できる学習の場を意図的に設ける。	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和4年度授業改善推進プラン記載内容 - 記載なし (2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現するための工夫等 - 児童の発達段階に応じて、様々な動きを繰り返し経験させる。また、その活動を繰り返す中で、試行錯誤したり、協同的に解決できるよう、運動の特性に合わせて、めあてやルールを工夫し、運動の楽しさを十分に味わえるようにする。 - 基本の運動を多く体験させ、体の動かし方を習得し、幅広い運動経験を積み重ねられるようにする。 - 児童同士教え合う場や発表する場を設け、児童が達成感を味わえるように学習計画を立てる。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 ＜方策＞ ①動きに応じた体の使い方を準備運動に取り入れ、基本的な動きを身に付けさせる。 学習カードを使い、身に付ける技能を明確にする。 ②友達同士、よい動きを見付けられるなど、互いに認め合える学習習慣を付け、運動の幅を広げさせる。	＜検証方法＞ ①ポイントの色分けをしたり、ホワイトボードを活用したりするなど、児童が視覚的に理解しやすいようにする。スモールステップによる学習の場を設けて8割の児童に達成感をもたせる。 ②ペア、グループでの話し合い活動や教え合う場を、適切に設定する。また、毎学習の最後に振り返りの場を設け、学びを整理させる。
4. 検証結果(成果と課題) <u>【年度末に記入する】</u> ＜成果＞ - 準備運動で、太鼓をつかったリズム運動などいろいろな動きを多く入れ、体の動かし方を身に付けさせた。 - グループ活動を多く取り入れ、教え合う場を通して、互いの良い所をまねっこしながら動きを習得できた。また、学習カードの振り返りから友達の良い点を見付けることができるようになった。 - スモールステップの学習により、達成感を味わいながら学習できた。 ＜課題＞ - よりよくなるような具体的なアドバイスを表現できるよう見本を示しながら練習する必要がある。	5. 令和7年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項 <u>【年度末に記入する】</u> 基本的な動きは身に付いているが、ジャンプや短縄など一定のリズムや間隔を取るのが難しい児童が多い。また、体の動かし方が分かっていないため、鉄棒などで布団干しのような体を前に倒すことが難しい児童がいる。体のどの部分をどう動かすのか具体的に手本を示しながら繰り返し練習をし、技をより上げられるとよい。
6. 令和7年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿 <u>【年度末に記入する】</u> 体を動かすことを楽しみながら、友達の良い所を真似したり、教え合ったりすることができる児童	

【別紙2】

〈授業改善推進プラン 令和6年度第1学年 道徳科〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現する上で解決すべき課題 ・登場人物の気持ちを想像したり、物事の事象について考えたりする力を高める。 ・自分の生活に結び付けて考えたり、今後に生かそうとしたりする力を高める。	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和4年度授業改善推進プラン記載内容 ・記載なし (2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現するための工夫等 ・学校生活や日常の振り返りをさせたり、場面を想像しやすいように具体的なものを提示したりする。 ・場面の挿絵を提示したり、役割演技や動作化をしたりして考えをもたせやすくする。 ・道徳的価値に関わる事象を児童の実態に即して具体的な事例を挙げて考え、自分の生活とつなげて考えさせる。そして、自己の生き方の課題を考え、実現していこうとする思いや願いを深められるようにする。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 ＜方策＞ ①考えをもつための時間の確保やペア学習や動作化を取り入れ、自分の気持ちの視覚化をする。 ② 自分の生活に結び付けて考えられる発問を吟味し、児童の実態に合わせて学習を展開する。 ＜検証方法＞ ①ペア学習を適宜入れることで、多様な考えに触れたり、役割演技や動作化を取り入れたり、気持ちを考えやすくしたりする。毎時間、振り返りを行い、自分が考えたことを記述、口頭で表現させる。 ②具体的な場面を思い起こさせたり、学習後も児童の生活の中で該当する場面を示したり、自分の生活とつなげて考えさせたりして、価値への意識づけを繰り返し行う。	
4. 検証結果(成果と課題) 【年度末に記入する】 ＜成果＞ ・役割分担やペア学習を多く取り入れ、自分の気持ちを考える手立てとなった。 ・ペア学習をすることで、自分の考えに自信をもって発表することができた。 ・いろいろな考えを聞く機会を多く設けたことで、自分と違う考えに気づき、受け入れる様子が見られた。 ＜課題＞ ・学習後、自分の生活とつなげて考えさせる、価値への意識づけが弱かった。	5. 令和7年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項【年度末に記入する】 ・具体的な場面を思い起こさせたり、学習後も児童の生活の中で該当する場面を示したり、自分の生活とつなげて考えさせたりして、価値への意識づけを行う。
6. 令和7年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿【年度末に記入する】 ・相手の気持ちを想像し、自分の生活へとつなげて考え、行動できる児童	

【別紙 2】

〈授業改善推進プラン 令和 6 年度第 2 学年 国語科〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現する上で解決すべき課題 ・問題で問われていることを正確に読み取ることが苦手である。 ・標準学力調査で身近なことを表す語句の量を増やし、語彙を豊かにする正答率が 72.9%で全国正答率 91.1%から課題がある。 ・標準学力調査で経験したことから書くことを見付け、文章を書くことの正答率が 59.1%で全国正答率 69.7%から課題がある。 ・経験したことから書くことを見付け、文章を書くことに課題がある。 ・自分の思いや考えが明確になるように、文章を書くことに課題がある。	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和 4 年度授業改善推進プラン記載内容 ・記載なし (2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現するための工夫等 【基礎基本が必要な児童】 ・音読の回数を増やし、文章に慣れさせる。 ・読み取ったことが視覚的に分かるように、色を分けて線を引く。 ・物語文や説明文を読むポイントを提示する。 【活用が必要な児童】 ・自分の考えを図や文を用いて表し、友達に説明する場面を多く設ける。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 ＜方策＞ ① 新出漢字を正しく読み書きでき、文をスムーズに読んだり書いたりできるようにする。また、自分の考えを書き表す方法を身に付けさせる。 ② スキルタイムを活用し、既習内容を振り返る。	＜検証方法＞ ① 国語の毎時間の漢字練習を丁寧に行う。家庭学習としても漢字ドリルを用いて、反復練習を行う。小テストでは、クラス平均 90 点以上を 2 学期、通して目指す。また、文の書き方の例や、図を用いた説明の方法を提示し、1 週間に一回、日記の学習を行う。 ② プリントやドリルの進捗状況をもとに検証する。
4. 検証結果(成果と課題) <u>【年度末に記入する】</u> ＜成果＞ ・3 分の 1 の児童は進出漢字を 95%以上理解できていることが成果である。 ＜課題＞ ・漢字小テストの平均点が 85 点程度だったことが課題である。また、習った漢字を生活で活用することにも課題が残った。	5. 令和 7 年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項 <u>【年度末に記入する】</u> ・学習した漢字を生活で活用することができるように間違っても良いのでどんどん使用するようになる。
6. 令和 7 年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿 <u>【年度末に記入する】</u> ・2 年生に配当された、進出漢字を正確に覚え、日常的に文章中に使用できる児童。 ・句読点や鍵括弧を、文章中で正しく使い、読み手に伝わる文章を書ける児童。	

【別紙 2】

〈授業改善推進プラン 令和6年度第2学年 算数科〉

1. 『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現する上で解決すべき課題

- ・基礎的な計算や単位を正しく覚える必要がある。
- ・式から文章問題を作ることに課題がある。
- ・問題で問われていることを読み取り、正しく立式することに課題が見られる。
- ・自分の考えを、既習内容を使って書くことが苦手である。
- ・標準学力調査でひき算の文章問題の正答率が 59.1%で全国正答率 74.2%から課題がある。
- ・標準学力調査で式から文章問題を作ること正答率が 18.2%で全国正答率 30.4%から課題がある。

2. 課題改善に向けた取組状況

(1) 令和4年度授業改善推進プラン記載内容

- ・記載なし

(2) 今年度実践している『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現するための工夫等

【基礎基本が必要な児童】

- ・導入で単元に関係する学習内容をおさらいし、基礎的な計算や単位を正しく覚える。
- ・単元ごとに小テストを実施し、スキルタイムなどを活用して補習を行う。

【活用が必要な児童】

- ・問題文に線を引き、情報を視覚的に整理する。
- ・単元の終末に式から文章問題を自ら作る活動を行う。

3. 課題の改善に向けた方策と検証方法

＜方策＞

- ①導入で復習を取り入れ、繰り返し練習を行う。
スキルタイム等で単元ごとの小テストを行う。
- ②視覚的におさらいしたことが分かるように、板書を工夫し、おさらい部分が一目で分かるように整える。また単元ごとに文章問題を作る活動を行う。

＜検証方法＞

- ①導入やスキルタイム、家庭学習を活用し、繰り返し習ったことを活用する機会を多く設ける。1単元の中でも、こまめに習熟具合をみとるようにする。
- ②ワークテストの知識と技能面で正答率8割を目標とする。2学期末までには思考を含めた3観点で正答率8割に到達させる。8割に到達していれば、概ね学習内容が身についたと考えられる。

4. 検証結果(成果と課題) 【年度末に記入する】

＜成果＞

- ・導入で復習を取り入れたり、繰り返し練習したりすることでワークテストの正答率が8割に到達できたことが成果である。

＜課題＞

- ・特になし

5. 令和7年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項【年度末に記入する】

- ・繰り返し練習することが大切なので、時間配分を意識し、演習の時間を増やす。また、授業初めに復習も継続して行う。

6. 令和7年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿【年度末に記入する】

- ・基礎基本の定着をし、文中の言葉を使ったり、具体物を操作したりして分かりやすく説明できる児童。

【別紙2】

〈授業改善推進プラン 令和6年度第2学年 生活科〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現する上で解決すべき課題 ・語彙が少なく、物の見方や考え方に偏りがあることが課題である。 ・生活体験が乏しく、具体的なイメージを持つことに課題が見られる。	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和4年度授業改善推進プラン記載内容 ・記載なし (2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現するための工夫等 ・見学したり、観察したりするポイントをおさえてから活動する。 ・実際に体験することができる活動を多く取り入れる。 ・体験するだけではなく、分かったことやできたことなどをワークシートに記入して書く、伝える活動を増やす。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 ＜方策＞ ① 地域の関係機関と連携して学習計画を立てる。 ② 視点を具体的に示し、より詳しく見たり聞いたりすることができるようにする。 ③ 単元ごとのワークシートを用意し、書いたり伝えたりする活動を行う。	＜検証方法＞ ① 地域の関係機関に働きかけ、働いている人の想いや、行われている仕事について、様々な方法でまとめられているか検証する。 ② 活動に入る前に、言葉の意味を確認し、全員が同じ視点で物事を見られているか検証する。 ③ ワークシートから分かったことやできたことなど自分の考えを記入できているか検証する。
4. 検証結果(成果と課題) <u>【年度末に記入する】</u> ＜成果＞ ・町探検後、グループでのまとめや発表を行ったことで、地域の施設や人々の思いに対して興味を広げることができた。 ・ワークシートから分かったことやできたことなど自分の考えを記入することができた。 ＜課題＞ ・言葉の意味を確認しながら学習をしたが、理解できずに学習に進んでいる児童もいた。	5. 令和7年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項 <u>【年度末に記入する】</u> ・自分の考えを書いたり、学習したことをまとめることはできている。まとめたことを相手に分かりやすく発表する力をつけたい。
6. 令和7年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿 <u>【年度末に記入する】</u> ・地域の人々と積極的に関わりをもとうとする児童。 ・地域に住む動植物に関りをもとうとする児童。 ・まとめたことを相手に分かりやすく発表することができる児童。	

〈授業改善推進プラン 令和6年度第2学年 音楽科〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現する上で解決すべき課題 ・個別の活動や一斉指導だけでは「わかった」「できた」という実感が少なく、学習意欲が向上しない傾向がある。 ・音楽科の学習では、児童の音楽活動と離れた個別の知識の習得や、技能の機械的な訓練に偏ってしまう傾向がある。音楽活動と関わらせながら知識や技能を習得することで「わかった」と実感したり、児童が主体的に学び、思考・判断・表現することで「できた」と感じたりすることができるようにする必要がある。 ・音楽づくりのための発想の幅が限定的であり、即興的な表現の技能に差がある。 ・鍵盤ハーモニカ奏において、音階と鍵盤を対応させて演奏することに課題がある。	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和4年度授業改善推進プラン記載内容 ・記載なし (2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現するための工夫等 【基礎基本が必要な児童】 ・個別に表現の技能を見取る機会を適宜設け、学習内容の達成状況を把握するとともに、その場でフィードバックを行い、児童が達成度や学びの方向を理解できるようにする。 ・音階や指遣いの指導を継続的にを行い、定着を図る。 【活用が必要な児童】 ・リズム打ち等、即興的に音楽づくりをする活動を増やし、思いついた表現を試せるようにする。 ・指導用DVDや生き物の鳴き声の視聴覚資料を活用し、自由な表現の発想を得られるようにする。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 ＜方策＞ ①リレー奏で演奏を繰り返し、定着を図りながら個別に器楽表現の聴取をする。 ②継続的に即興表現の場面を設け、表現の試行錯誤の回数を増やす。	＜検証方法＞ ①個別の演奏聴取によって児童の器楽技能の達成度や課題を細かく記録し、指導を検証する。7割の児童が適切な旋律で演奏できるようにする。 ②児童の表現の様子を記録し変容を明確にし、指導を検証する。7割以上の児童が簡単な音楽をつくる技能を身に付けられるようにする。
4. 検証結果(成果と課題) 【年度末に記入する】 ＜成果＞ ・鍵盤ハーモニカ奏では、指番号と音名、鍵盤の位置を正しく覚えることができた。 ・音高やリズムを工夫しながら、簡単な旋律をつくる技能が身に付いた。 ＜課題＞ ・音高やリズムを即興的に変えながら音楽づくりをしたが、自分の表現に自信をもてない児童もいた。	5. 令和7年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項【年度末に記入する】 ・鍵盤奏の前に階名唱や指番号唱に取り組むことで、スムーズに器楽指導を行うことができる。 ・音楽づくりでは、音高の動きやリズムの形を細かく提示し、工夫する観点を示すことで、自信をもって表現できるようにする。
6. 令和7年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿【年度末に記入する】 ・鑑賞曲などから着想を得て、思いや意図をもち、表現活動を楽しむことができる児童	

〈授業改善推進プラン 令和6年度第2学年 図画工作科〉

1. 『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現する上で解決すべき課題 ・2年生は6学年の中で最も図画工作の時間が多い。多様な単元を取り扱うとともに、1年生で取り扱った道具や材料を使いこなせるよう、技能を応用をした授業をしたり、造形遊びをしたり、授業を通して豊かな情操を身に着けるようにする。 ・道具や材料の基本的な使い方をしっかりと理解し、つまずきなく楽しく活動できるようにする。 ・お互いの作品の良いところを参考にしたり、以前学習したことを生かしたりすることができているので、さらにその力を高める。	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和4年度授業改善推進プラン記載内容 ・記載なし (2) 今年度実践している『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現するための工夫等 ・材料や道具などの使い方を掲示や ICT 機器を活用して確認して、工夫の仕方などを理解する。 ・活動自体を楽しみ、新たな自分の側面や表現方法に気付けるように、体全体を使った活動や様々な材料を使った作品づくりなどを行う。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 ＜方策＞ ① 掲示や ICT 機器を活用しての材料や道具の使い方や工夫の仕方の確認を行う。 ② 体全体を使った活動や様々な材料を使った作品づくりなどを行う。	＜検証方法＞ ❶ 児童や作品の観察。全児童が材料や道具を正しく扱え、どんな小さな工夫でも良いので自分なりの工夫をできるようにする。 1学期に基本的な技能を観察し、以降支援が必要な児童には適宜支援を行っていく。 ❷ 児童や作品の観察。全児童がある程度新たな表現方法の面白さなどに気付けるようにする。
4. 検証結果(成果と課題) 【年度末に記入する】 ＜成果＞ ・基本的な材料や道具の扱い方を掲示や ICT を活用することにより正しく扱うことができていた。 ・様々な材料を使った作品づくりなどを行い、表現方法の幅を広げることができた。 ＜課題＞ ・新たな自分の側面を発見したり、発想を広げたりする力をさらに伸ばしたい。	5. 令和7年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項【年度末に記入する】 ・さらなる基本的な材料や道具の扱い方の定着のために掲示や ICT などを活用して取り組んでいく。 ・導入や材料なども工夫し、児童が意欲的に取り組みながら発想を広げられるようにする。
6. 令和7年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿【年度末に記入する】 活動を楽しみながら、自分なりの発想をしたり、試行錯誤したりできる児童	

〈授業改善推進プラン 令和6年度第2学年 体育科〉

1. 『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現する上で解決すべき課題 ・「体づくりの運動遊び」では、体をうまく使いこなすことに個人差がある。 「表現あそび」では、表現するものを知らないこと。イメージ通りに体を動かすことに課題がある。 ・活動の意図や、危険な部分に気づきにくい。	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和4年度授業改善推進プラン記載内容 ・記載なし (2) 今年度実践している『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現するための工夫等 ・運動量を確保し、様々な運動遊びを楽しんで活動できるようにする。 ・多様な動きに触れる機会を設けたり、様々な動きを実際に見せたりすることで体の使い方を理解する。 ・「何のために活動するのか」「やってはいけないことは何か」目的意識を持たせ、活動に意欲的に取り組むことができる場面を増やす。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 ＜方策＞ ①自分たちの考えを交流できる場を設定する。 ②事前に活動内容の提示方法の工夫をする。	＜検証方法＞ ①友達の考えを聞いて、自分の動きと組み合わせたり、うまく動くポイントを見つけたりできるようにし、ワークシートで検証する。 ②活動前に目標を立てたり、自分ができるようにするポイントを確認したりする機会を設け、ワークシートでめあての達成度を検証する。
4. 検証結果(成果と課題) 【年度末に記入する】 ＜成果＞ ・運動が苦手な児童も、運動の楽しさに触れることができたことが成果である。 ＜課題＞ ・活動時間を十分に確保するために、ワークシートでの振り返りは、本時に行うことができず、違う教科の授業で行うことが多かった。	5. 令和7年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項【年度末に記入する】 ・どの児童も、運動の楽しさに触れることができるように運動量を確保したり、共有ボードを活用した見通しをもつことができる授業展開を考察したりする。 ・体育で使用する各教具の準備の仕方をしっかりと教え、安全に準備を行えるようにする。
6. 令和7年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿【年度末に記入する】 ・自分の思った通りに体を動かして、運動を楽しむことができる児童。 ・安全に気をつけながら準備から片付けまで、友達と協力できる児童。 ・自分で創意工夫をしながら、自分の動きを高められる児童。	

〈授業改善推進プラン 令和6年度第2学年 道徳科〉

1. 『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現する上で解決すべき課題 ・人物の気持ちを想像したり、背景にある事象に目を向けたりすることが難しいこと ・生活経験が少ないため、考えに偏りがあること	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和4年度授業改善推進プラン記載内容 ・記載なし (2) 今年度実践している『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現するための工夫等 ・「自分だったら」と、状況を把握し、自身に置き換えて考える場の設定をする。 ・多様な考えを受け入れたり、多面的に物事を考えるための発問をしたりする。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 ＜方策＞ ① 道徳科に生かす指導方法の工夫（発問の工夫） 児童が自分との関わりで道徳的価値を理解したり、自己を見つめたり、物事を多面的・多角的に考えたりするために、考える必然性や切実感のある発問、自由な思考を促す発問物事を多面的・多角的に考えたりする発問などを心掛けるようにする。 ② 話し合いの工夫 児童相互の考えを深めるために、話し合いの工夫をする。考えを出し合う。まとめる。比較するなどの目的に応じて効果的に話し合いが行われるよう工夫する。 ＜検証方法＞ ① 日常生活の中で似たような題材を見付けて学習に関連させ、自分の考えをもつことができるようにし、ワークシートでの記入内容で検証する。 ② 個々の考えをグループや全体で交流し、多様な考えに触れられるようにする。ワークシートの記入内容で検証する。	
4. 検証結果(成果と課題) 【年度末に記入する】 ＜成果＞ ・個々の考えをグループや全体で交流し、多様な考えに触れられたことが成果である。 ＜課題＞ ・教科書の内容と児童の実態が合わないときもあり、考えが深まらないときがあった。	5. 令和7年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項【年度末に記入する】 ・自分だったらどう考えるか「自分事」として考え、友達とたくさん交流をし、多様な価値観を共有する。
6. 令和7年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿【年度末に記入する】 ・自分だったらどう考えるか「自分事」として考え、友達とたくさん交流をし、多様な価値観を共有することができる児童。	

【別紙2】

〈授業改善推進プラン 令和6年度第3学年 国語科〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業を実現する上で解決すべき課題

- ・令和6年度村学力調査から、全国平均を下回る結果だった。特に「書くこと」の領域では、全国平均から10%下回った。問題別で見ると、「ことばの学習」「物語を読み取る」「説明文を読み取る」「文章を書く」について、全国平均から5%～10%下回っている。そのため、相手の話をよく聞いて理解し、それに対して自分の考えや思いを適切に話す力を高めていく必要がある。

2. 課題改善に向けた取組状況

(1) 令和4年度授業改善推進プラン記載内容

- ・時間を確保して、漢字の習得や国語辞書を使う機会を学級全体で取り組む。
- ・作文や日記指導を定期的に設け、書く機会を増やす。
- ・物語文や説明文の学習時における読前後の感想文の交流機会を設ける。また、教科書教材と関連させて本や文章を読むことを位置付ける並行読書をすすめていく。

(2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業を実現するための工夫等

【基礎基本が必要な児童】

- ・日頃から辞書を引かせたり、多読させたりする習慣を身に付けさせる。

【活用が必要な児童】

- ・自分の考えを説明したり書いたりする機会をさらに増やす。
- ・分からない言葉を国語辞書で引かせてノートに書かせる。ノートを提出させ確認をする。
- ・初発の感想、学習後の感想は必ず書かせ、交流機会を設け確認する。

3. 課題の改善に向けた方策と検証方法

＜方策＞

- ①教師が教科書を範読した時に、文章内で児童が分からない言葉を挙げさせて、国語辞典で調べさせたり、その場で教師が意味を伝えたりして、児童が言葉に関して理解を深められるようにする。
- ②読解力を身に付ける。語彙力を伸ばすために多読し、要約する習慣を付ける。

＜検証方法＞

- ①児童のノートを回収し、意味調べの意味が合っているか確認をする。単元テストの「言葉」の得点平均、50点満点中40点以上を目指す。
- ②週に1回の図書の時間に、読書カードに話の要約と感想を書かせる。1年間で30冊の要約を目指す。

4. 検証結果(成果と課題) 【年度末に記入する】

＜成果＞

教師の範読後、児童が文章内で分からない言葉を挙げ、国語辞典で調べ、言葉の意味を理解したことで、文章の読解力が高まった。

＜課題＞

調べた言葉を記録できる「意味調べ帳」を作ると、覚えた言葉が蓄積していき、分からない時にふりかえることができるのでよいと感じた。

5. 令和7年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項 【年度末に記入する】

- ・「ことばの学習」「物語を読み取る」「説明文を読み取る」「文章を書く」それぞれの力を高めるためには、多くの本と出会い、多読させる時間を確保することが大切だと感じた。
- ・文章を書く場面では、助詞の間違い「を・は・に」があるため、机間指導で直したり、スキルタイムの時間を使って、年間を通して指導していく必要がある。また、文章を書いた後にその文章を音読させ、児童自身が間違いに気付けるように指導することが必要である。

6. 令和7年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿 【年度末に記入する】

思ったことや伝えたいことを、相手に伝わりやすく書くことができる児童

【別紙 2】

〈授業改善推進プラン 令和 6 年度第 3 学年 社会科〉

1. 『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現する上で解決すべき課題 ・小笠原村に関連することだけに限定せずに、一般的な社会的事象への興味・関心、知識・技能を高める必要がある。 ・社会科における学び方、問題解決的な学習を理解する必要がある。	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和 4 年度授業改善推進プラン記載内容 ・授業はじめに時間をとって、地図帳を使っての日本や世界の都市、地名、名称などの学習を取り入れ、一般的な社会的事象に対して興味・関心を誘う。 ・全単元のはじめに、学習問題を考え提示し、それを解決するために学習をすすめていくことを定着させる。 ・私たちの住む小笠原村の学習を中心に行うが、発展的に内地の様々な地域の様子も紹介する。 (2) 今年度実践している『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現するための工夫等 【基礎基本が必要な児童】 ・授業の導入で前時のおさらいをする。 ・地図帳や教科書の活用機会を設ける。 ・ノートや I C T 機器の活用方法の提示。自分で調べまとめ解決する学習方法の定着を図る。 ・単元ごとにノートを回収し、学習状況を把握する。 【活用が必要な児童】 ・児童が必要に応じて ICT 教材やドリルパーク、プリントなどで既習を振り返り、教材を活用しているかを確認する。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 ＜方策＞ ①ニュースにふれる習慣をつけて、世の中についての理解を深め、知的好奇心を育む。 ②児童の素朴な疑問を大切に、諸資料や調査活動などを通して調べ、思考・判断・表現する。	＜検証方法＞ ① 2 学期から週末にデジタル新聞を児童に渡し、朝の日直のスピーチで取り上げさせる。 ② 2 学期からグループ発表を行うとともに、単元の終末に、「どんな力が身に付いたか」振り返りをする。単元テストの平均点 80 点以上を目指す。
4. 検証結果(成果と課題) 【年度末に記入する】 ＜成果＞ 年間を通して、こども新聞の記事や、時事ニュースを児童に紹介したことで、世の中に興味を示す児童が増えた。 ＜課題＞ 時事ニュースと、社会で学んだ知識を、児童自身がつなげることは、まだ難しい。社会科見学で施設を見学しても、記憶に残っていない児童も多い。	5. 令和 7 年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項 【年度末に記入する】 ・単元のはじめは、町歩きを多く取り入れたい。仲間と歩き、観察することで、他者と協力し、分担し、話し合うことの必要性も指導したい。 ・地図記号や方位、地図帳の調べ方や、資料の読み取り方などの、基礎的なことは年間を通して指導する。
6. 令和 7 年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿 【年度末に記入する】 社会的な見方や考え方をはたらかせることができる児童	

【別紙 2】

〈授業改善推進プラン 令和6年度第3学年 算数科〉

1. 『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現する上で解決すべき課題

- ・令和6年度学力調査では、「データの活用」領域は全校平均を上回っていたものの、「数と計算」「図形」「測定」領域では課題が見られた。
- ・「はこの形」の誤答内容を分析したところ、展開図や棒を、立体に組み立てるイメージの難しさがある。空間認識能力を高める必要がある。
- ・結合法則や不等号の意味といった知識を定着させる必要がある。

2. 課題改善に向けた取組状況

(1) 令和4年度授業改善推進プラン記載内容

- ・ブロックを使い、具体的操作を取り入れ、数の合成、分解を繰り返し行い、数の感覚を養う。
- ・ブロックを使った操作活動や問題文を絵でかき表したり、図で表したり、問題場面を具体的にイメージさせる活動を多く取り入れたりとしながら、問題解決へつなげていく。
- ・文章問題の中のキーワード「ぜんぶで」「あわせて」「のこりは」などに着目させる。

(2) 今年度実践している『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現するための工夫等

【基礎基本が必要な児童への手立て】

- ・具体物や半具体物の操作を通して、図形の構成や計算の意義を感覚的に捉えられるようにする。例えば立体の展開図ならば、工作用紙を使って実際に切って組み立てる。距離感を養うために、実際に学校の近所を1km歩いてみて、長さや単位の測定を想像ではなく実感できるようにする。

【活用が必要な児童への手立て】

- ・ICT教材によるクイズ形式での振り返りや、自作問題作りなどを通して、児童が主体的に算数の学習に取り組み、学んだことを覚え、活かしたいと思える授業を行う。

3. 課題の改善に向けた方策と検証方法

＜方策＞

- ①具体物を操作したり体験したりすることで「わかる」を体感できるような授業を行う。
- ②ペア学習やグループ学習を通して、友達に分かったことを自分の言葉で伝え、知識の定着を図る。

＜検証方法＞

- ①毎単元に一時間は、具体物の操作やグループ学習を取り入れ、学んだ知識や技能の定着を図る。
- ②ワークテストの知識と技能面で正答率8割を目標とする。2学期末までには思考を含めた3観点で正答率8割に到達させる。8割に到達していれば、概ね学習内容が身についたと考えられる。

4. 検証結果(成果と課題) 【年度末に記入する】

＜成果＞

既習事項を基に、自分の考えをノートにまとめ、友達に伝えることができた。

＜課題＞

計算ミスやコンパスの線が正確に描けないなど、技能面には課題がある。

5. 令和7年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項 【年度末に記入する】

- ・自分の考えたことを友達に伝えたり、友達の言っていることをよく聞き理解したりといった、話し合いや交流がより活発になるとよい。
- ・計算や作図は反復練習を行い、技能を高める。

6. 令和7年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿 【年度末に記入する】

- ・話し合い活動を通して、皆で解を導き出せる。
- ・基礎学力の向上

【別紙 2】

〈授業改善推進プラン 令和 6 年度第 3 学年 理科〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現する上で解決すべき課題

- ・理科における学び方、問題解決的な学習を理解する。
- ・小笠原に関連する地域教材だけでなく、一般的な理科的事象への興味・関心、知識・技能を高める必要がある。

2. 課題改善に向けた取組状況

(1) 令和 4 年度授業改善推進プラン記載内容

- ・すべての単元において、特に実験領域では、理科における学び方、問題解決型の学習習慣を身に付けさせる。
- ・実物を観察したり、実験をしたりできない教材については、I C T 機器を使っての学習補充を行う。
- ・単元ごとにドリル的な学習を取り入れる。

(2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現するための工夫等

【基礎基本が必要な児童】

- ・毎回の授業、ノート指導で理科における学び方、問題解決型の学習習慣を図る。
- ・I C T 機器を使って、視覚的に学習内容の確認を行う。
- ・単元ごとにノートを回収し、学習状況を把握する。
- ・単元学習後のテストにおける平均点を分析する。また、解き直しの徹底を図る。

【活用が必要な児童への手立て】

- ・予想を考えるときに、既習事項や生活経験を根拠に考えられるようにする。
- ・実験や観察の結果をもとに、問題と結び付けて結論を自分の言葉で考えられるようにする。

3. 課題の改善に向けた方策と検証方法

＜方策＞

- ①教材は自分たちで用意させ、生き物は責任をもって世話をさせる。また、観察する時間を十分に確保する。
- ②児童の素朴な疑問を大切に、観察や諸資料、調査活動などを通して調べ、問題解決能力を育てる。

＜検証方法＞

- ① 4 月から観察カードに、気付き・疑問・感想を毎回書かせ。また、実験時に観察器具を適切に使っているか見る。知識・技能の観点で、単元テストの平均点 80 点以上を目指す。
- ② 単元の終わりにグループ発表を行う。2 学期末までには思考を含めた 3 観点で、単元テストの平均点 80 点以上を目指す。

4. 検証結果(成果と課題) 【年度末に記入する】

＜成果＞

ほとんどの児童が目標を達成できた。実験で出た疑問を、次の課題として設定し、意欲を持ちながら活動に取り組むことができた。

＜課題＞

実験器具の扱い方を忘れてしまう児童が多い。

5. 令和 7 年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項 【年度末に記入する】

- ・理科の実験器具(ルーペ・温度計・電子計り、天秤)の使い方を確実に理解できるよう指導する。
- ・実験結果や観察中のものを、I C T 端末で記録できるよう児童に指導しておく。

6. 令和 7 年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿 【年度末に記入する】

自然の事物・事象について、科学的な見方や考え方ができる児童。

【別紙2】

〈授業改善推進プラン 令和6年度第3学年 音楽科〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業を実現する上で解決すべき課題

- ・個別の活動や一斉指導だけでは「わかった」「できた」という実感が少なく、学習意欲が向上しない傾向がある。
- ・音楽科の学習では、児童の音楽活動と離れた個別の知識の習得や、技能の機械的な訓練に偏ってしまう傾向がある。音楽活動と関わらせながら知識や技能を習得することで「わかった」と実感したり、児童が主体的に学び、思考・判断・表現することで「できた」と感じたりすることができるようにする必要がある。
- ・ハ長調の五線譜を見て歌ったり演奏したりする知識及び技能に課題がある。
- ・器楽の適切な演奏の仕方の定着に、丁寧な指導を要する児童が見られる。

2. 課題改善に向けた取組状況

(1) 令和4年度授業改善推進プラン記載内容

- ・絵譜などを用いて曲想の感じ取りを深めたり、それを生かした表現をしたりすることができるようにする。
- ・一人ずつ歌ったり演奏したりし、技能の習得状況を把握して、必要に応じて個別指導を行う。

(2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業を実現するための工夫等

【基礎基本が必要な児童】

- ・個別に表現の技能を見取る機会を適宜設け、学習内容の達成状況を把握するとともに、その場でフィードバックを行い、児童が達成度や学びの方向を理解できるようにする。
- ・ICT 機器及び教材を用いて、基礎的な知識の定着を図る。
- ・器楽奏の仕方を毎回確認し、正しい演奏法の定着を図る。

【活用が必要な児童】

- ・楽譜を見て歌う、楽譜を見て聴く習慣を定着させ、音楽の構造と楽譜の構造が結びつくようにする。

3. 課題の改善に向けた方策と検証方法

＜方策＞

- ①歌唱や器楽に必要な基礎的な知識・技能の定着を図る。ICT 機器及び教材の活用や、楽譜を見て学ぶ学習を通して、指導と記録をする。
- ②範唱（範奏）と模唱（模奏）を繰り返す活動を増やし、演奏聴取をその後の指導に生かす。

＜検証方法＞

- ①一人一人の正答率や、行動観察・演奏聴取を通して、児童の変容を記録し、指導を検証する。適切な演奏法や読譜力の定着率は7割を目指す。
- ②個別または少人数の演奏聴取によって児童の表現技能の達成度や課題を細かく記録し、指導を検証する。7割の児童が適切なリズムと音程で表現できることを目指す。

4. 検証結果（成果と課題）【年度末に記入する】

＜成果＞

- ・適切なリコーダーの演奏法については、7割以上の児童への定着が見られた。
- ・正しいリズムや音程で表現する技能が身に付いた。

＜課題＞

- ・児童によって読譜力の定着に差があり、特に音価についての指導を充実させていく必要がある。

5. 令和7年度（次学年）の学習指導において特に留意すべき事項【年度末に記入する】

- ・範唱（範奏）と模唱（模奏）を反復させることで、読譜をより効果的に行うことができる。
- ・読譜指導については、ICT などを用いた継続的な取り組みが必要である。常時的に家庭などで活用できる教材を研究する必要がある。

6. 令和7年度（次学年）末に期待する児童（生徒）の姿【年度末に記入する】

表現の知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲にふさわしい表現を工夫することのできる児童

【別紙 2】

〈授業改善推進プラン 令和 6 年度第 3 学年 図画工作科〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現する上で解決すべき課題 ・ 3 年生では材料に加えて、場所からも発想して活動を思い付くこともできるようになってくる。また、平面的な活動から切ったり、組み合わせたりといった構成的な要素を意識できるよう活動に取り組むようにする。 ・ 道具や材料の基本的な使い方をしっかりと理解するとともに、表し方をさらに工夫する力を高める。 ・ 一つの発想方法や考え方だけでなく、様々な方法があることに気付き、意欲的に楽しんで試せるようにする。	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和 4 年度授業改善推進プラン記載内容 ・ 身に付けた技能を繰り返し使える機会を増やし、定着を図る。 ・ 工夫している児童の作品、様々な参考作品や考え方などを紹介する。 ・ 材料や道具などの使い方で工夫できるところや組み合わせでできることなどを確認する。 ・ アイデアスケッチ、ワークシートなどを活用してアイデアを広げる。 (2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現するための工夫等 ・ 材料や道具などの使い方を掲示や ICT 機器を活用して確認する。 ・ 児童作品を紹介したり、幅広く材料や道具などを選べる題材などを設定したりして、自分なりに考えたり、選んだりする活動を増やす。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 ＜方策＞ ① 掲示や ICT 機器を活用しての材料や道具の使い方や工夫の仕方の確認を行う。 ② 自分なりに考えたり、選んだりする場面を増やして、自分でつくりだす力を高める。	＜検証方法＞ ① 児童や作品の観察。全児童が材料や道具を正しく扱え、活動につまずきがないようにする。 1 学期に基本的な技能を観察し、以降支援が必要な児童には適宜支援を行っていく。 ② 児童や作品の観察。そのような場面の時に全児童がある程度自分のつくりたいものに合わせて、自分で考えたり、選べたりできるようにする。
4. 検証結果(成果と課題) <u>【年度末に記入する】</u> ＜成果＞ ・ 基本的な材料や道具の扱い方を掲示や ICT を活用することにより正しく扱うことができていた。 ・ 自分なりに考えたり、選んだりすることはできていた。 ＜課題＞ ・ 自分でさらに工夫したり、発想したりしてつくりだす力をさらに高めたい。	5. 令和 7 年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項 <u>【年度末に記入する】</u> ・ さらに基本的な材料や道具の扱い方の定着のために掲示や ICT などを活用して取り組んでいく。 ・ ねらいや目的などを意識させながら、活動に取り組んだり、材料や道具を扱ったりできるように導入や説明を行う。
6. 令和 7 年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿 <u>【年度末に記入する】</u> 自分で考えたり、感じたりして豊かに表現や工夫する力のある児童	

〈授業改善推進プラン 令和6年度第3学年 体育科〉

1. 『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現する上で解決すべき課題

- ・児童が基本的な動作や運動の技能を身に付けるように、運動の目的や方法を理解させるとともに、繰り返しの練習の時間を確保する。
- ・単に運動を行うだけでなく、児童が自分の動きを理解し、修正するためのフィードバックを行う。
- ・技能を高める場面で運動に対する興味や意欲を持続させることが課題である。

2. 課題改善に向けた取組状況

(1) 令和4年度授業改善推進プラン記載内容

- ・どの領域でも「楽しい」と思える運動、活動を必ず入れる。
- ・自己評価と他者評価を1時間の授業のふりかえりとして行う。

(2) 今年度実践している『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現するための工夫等

- ・児童が「わかる」だけでなく「できる」を実感するまでには時間がかかるため、途中で意欲を失わないよう、ゲーム形式や仲間との協力・競争など、楽しさを取り入れた指導を行っている。また、達成度に応じた褒める場面を設け、児童の自信を育てている。
- ・教師が個々の動きを観察し、具体的な改善点をフィードバックしている。また、児童自身が自分の運動を振り返り、改善点を見付けるための時間を設けている。

3. 課題の改善に向けた方策と検証方法

＜方策＞

- ①運動能力にばらつきが大きいので、基礎的な動きや簡単な運動を中心に、補助具を使用してサポートする。グループごとの目標は、楽しさや達成感を重視した簡単なものに設定し、基本的な動きに慣れることを目指す。
- ②短い時間で達成可能な小さな目標を設定し、成功体験を積み重ねる。フィードバックはシンプルでわかりやすい言葉を用い、児童が理解しやすいよう視覚的なサイン（シールやスタンプ）を使って具体的な改善点を示す。
- ③ゲームを通じて自然に運動する楽しさを感じられるよう、ルールの簡単なゲームを導入し、競争よりも協力を重視する。努力や参加する姿勢を褒めることに重点を置き、児童の自信を育む評価システムを活用する。

＜検証方法＞

- ①児童の運動能力向上の変化を定期的に記録し、各児童が設定された目標を達成できたかを評価する。また、授業後のアンケートを通じて児童の満足度や自己評価を分析する。
- ②児童の成功体験の頻度と、それに対する自己評価を授業後のフィードバックシートで確認する。さらに、定期的な技術テストやパフォーマンスの変化を観察する。
- ③授業中の参加率や積極性の観察、アンケートや口頭でのフィードバックを通じて児童の意欲や楽しさを感じているかを評価する。

4. 検証結果(成果と課題) 【年度末に記入する】

＜成果＞

- ・ゲーム形式の導入や協力を重視した活動により、運動に対する楽しさを感じる児童が増え、授業への参加意欲が向上した。
- ・短い時間で達成可能な目標を設定したことで、児童が小さな成功体験を積み重ね、自信を持つ姿が見られた。
- ・シールやスタンプを用いたフィードバックが視覚的にわかりやすく、児童自身が動きの改善点を意識する機会が増えた。
- ・補助具の活用により、運動が苦手な児童も基本的な動きを身につけやすくなり、運動への抵抗感が軽減された。

＜課題＞

- ・児童の運動能力のばらつきが大きく、全員が適切な負荷で取り組めるよう、さらに個別対応の工夫が必要である。
- ・成功体験を積み重ねる工夫をしているものの、継続的な意欲につながらない児童もいるため、より個別に応じた動機付けの方法を模索する必要がある。
- ・自己評価や振り返りの時間を確保しているが、一部の児童がフィードバックを十分に理解・活用できていないため、より具体的で実践しやすい振り返り方

5. 令和7年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項 【年度末に記入する】

- ・児童の運動能力の個人差に応じて、活動のレベルを柔軟に調整し、一人ひとりが「できた!」と実感できる環境を作る。
- ・ゲーム性を重視しながらも、基本的な動作やフォームを意識する時間を確保し、技能向上につなげる。
- ・自己評価の方法を工夫し、児童が自分の成長を実感しやすいように具体的な振り返りシートや映像記録を活用する。
- ・授業内で児童同士の協力を促し、お互いに学び合う機会を増やすことで、指導者だけでなく仲間からのフィードバックも取り入れる。

法の工夫が求められる。	
6. 令和7年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿【年度末に記入する】 ・運動に対して前向きに取り組み、楽しさを感じながら継続的に努力できるようになっている。 ・基本的な運動技能が向上し、自分の動きを意識しながら適切に修正する力が身についている。 ・仲間と協力しながら運動することの大切さを理解し、積極的にコミュニケーションを取れるようになっている。 ・自己評価を通じて、自分の成長を実感し、運動への意欲を維持できるようになっている。	

【別紙2】

〈授業改善推進プラン 令和6年度第3学年 道徳科〉

1. 『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現する上で解決すべき課題 ・教材、資料から、その道徳的価値について、自分事として深く考えられる力を身に付ける。 ・考えたことを実践、実行する力を身に付ける。			
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和4年度授業改善推進プラン記載内容 ・教師と児童の1対1の問答にならないよう、児童同士、学級全体で話し合える場を多く設定する。 ・動作化や役割演技を取り入れる中で、道徳的価値を自分事としてとらえる機会を多くもつ。 ・毎時間、学習を振り返る時間をつくり、その授業の道徳的価値を自分事として理解する。 (2) 今年度実践している『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現するための工夫等 ・教材提示、板書を工夫しながら授業のねらいが視覚的に捉えられるようにする。 ・「なぜ」「どうして」「自分だったらどうするの」を問答しながら、みんなで考えていく。 ・毎時間必ずワークシートを使って児童の思いや考えを確認する。 ・日頃の生活の中で、道徳の授業内で学んだ道徳的価値について、振り返り、確認をする。			
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 <table border="1"> <tr> <td> ＜方策＞ ①文章をグループで音読し、自分の考えを話したり、相手の考えを聞いたりして、自分の考えを広げ深める。 ②毎時間同じ学習展開を行い、自分の変容が感じられるようにする。 </td><td> ＜検証方法＞ ①グループで話し合い、友達の考えを記録させたり、それに対する自分の考えを書かせたりして、発表させる。 ②道徳カードの記載に、話の要約を書かせ、「自分だったらどうするか」を書かせる。 </td></tr> </table>		＜方策＞ ①文章をグループで音読し、自分の考えを話したり、相手の考えを聞いたりして、自分の考えを広げ深める。 ②毎時間同じ学習展開を行い、自分の変容が感じられるようにする。	＜検証方法＞ ①グループで話し合い、友達の考えを記録させたり、それに対する自分の考えを書かせたりして、発表させる。 ②道徳カードの記載に、話の要約を書かせ、「自分だったらどうするか」を書かせる。
＜方策＞ ①文章をグループで音読し、自分の考えを話したり、相手の考えを聞いたりして、自分の考えを広げ深める。 ②毎時間同じ学習展開を行い、自分の変容が感じられるようにする。	＜検証方法＞ ①グループで話し合い、友達の考えを記録させたり、それに対する自分の考えを書かせたりして、発表させる。 ②道徳カードの記載に、話の要約を書かせ、「自分だったらどうするか」を書かせる。		
4. 検証結果(成果と課題) 【年度末に記入する】 ＜成果＞ ほとんどの児童が目標を達成できたと言える。毎時間必ずワークシートを使って、児童自身と友達の考えを書かせたことで、自分以外の人の見方やものへの考え方を理解することができた。 ＜課題＞ 日常生活の中で、道徳で学んだこと(あいさつ・公共のマナーを守ること・仲間外れにしない)を生かすことができない児童もいる。	5. 令和7年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項【年度末に記入する】 ・児童の家庭環境や、人間関係によっては、取り上げる内容に留意したい。 ・生活経験の少ない児童が場面を想像しやすいように、役割演技をさせたり、補助資料を用意する。		
6. 令和7年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿【年度末に記入する】 自分とは違う意見や立場を理解できる児童			

【別紙 2】

〈授業改善推進プラン 令和 6 年度第 3 学年 総合的な学習の時間〉

1. 『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現する上で解決すべき課題

- ・小笠原独自の自然、文化、伝統を学び、その大切さを理解し、継承していこうとする気持ちを養う。

2. 課題改善に向けた取組状況

(1) 令和 4 年度授業改善推進プラン記載内容

- ・探究的な学習過程を通して、自分自身で情報を取捨選択し、整理できるようにする。
- ・次世代につながるように自ら進んでまとめていく。

(2) 今年度実践している『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現するための工夫等

- ・学習ゴールを提示し、それに向かって自分自身や友達同士で、探求し情報を整理しまとめていく。
- ・毎時間、学習の振り返りを行う。
- ・ワークシートを活用しながら、自分で考えたことを随時まとめポートフォリオ化していく。
- ・自分たちが学んできたことを下級生や保護者に伝える活動を通して学びの確認をする。

3. 課題の改善に向けた方策と検証方法

＜方策＞

- ①他班と活発に情報交換できるようにする。また、話しながら大切なことをメモする技能を高める。

- ①自分たちが単元を通して深めてきたものを、アウトプットできる活動計画を考える。

＜検証方法＞

- ①ジャムボード交流、ワールドカフェ方式など、さまざまな形態で話し合ったことを総合ノートに記録する。

- ②グループ発表を行うとともに、単元の終末に、「どんな力が身に付いたか」振り返りをする。

4. 検証結果(成果と課題) 【年度末に記入する】

＜成果＞

ゴールとして学習発表会を設定したことで、児童が意欲的に学習に向かっていた。

＜課題＞

学んだことをアウトプット(地域のお店や、掲示板にポスターを貼る・チラシを配る等)をする基盤が、整っていなかった。

5. 令和 7 年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項 【年度末に記入する】

- ・ゲストティーチャーとの連携を図ること。学習発表会後に、児童がポスターを貼る・チラシやビラを店先に置いてもらう等の活動の協力依頼が、児童からできるよう指導する。
- ・

6. 令和 7 年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿 【年度末に記入する】

身に付けた資質能力を用いて、課題を解決する中で多様な視点から考えることができる児童

【別紙 2】

〈授業改善推進プラン 令和6年度第4学年 国語科〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現する上で解決すべき課題 令和6年度村学力調査から、全国平均を下回る結果だった。特に「話すこと・聞くこと」領域では、全国平均から11.5%下回った。問題別で見ると、「話し合いの内容を聞き取る」についても全国平均から5%下回っている。そのため、相手の話をよく聞いて理解し、それに対して自分の考えや思いを適切に話す力を高めていく必要がある。	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和4年度授業改善推進プラン記載内容 - 記載なし (2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現するための工夫等 【基礎基本が必要な児童】 - 当日までに1分間スピーチの原稿を用意して、発表する。 - ペアでの意見交換の場面をつくり、必然的に話す、聞く機会を設ける。 【活用が必要な児童】 - インタビューなどで、自分の用意した質問だけでなく、相手の回答に応じて、深堀する質問や話をつなげたりできるようにする。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 ＜方策＞ ① 全校朝会のある日の授業内で、校長先生の話のを要約して書く時間を設ける。話を聞く必要感や必然性を設け、ポイントを絞って聞く習慣を付ける。 ② 毎授業の5分程度、ペアで質問者と回答者に分かれて話し続ける活動を行う。相手の話を理解し、一つの話題で話したり聞いたりし続ける力を養う。	＜検証方法＞ ① 教師から、クイズ形式で校長先生の話の聞けているか確かめる。教師側が提示した要点を8割以上抑えられているかを検証する。 ② ペアで相互評価を行う。3学期末までに、8割の児童が、5分間話し合い続けることができるか観察、記録し検証する。
4. 検証結果(成果と課題) 【年度末に記入する】 ＜成果＞ 全校朝会のあとに校長先生がどんな話をしていたか3択クイズをすると9割以上の児童が正解した。学習の中でお互いの話を聞いて適切に意見を言える児童は8割程度になった。 ＜課題＞ 校長先生の話題は分かるが、内容について答えられる児童は5割、話し合いを5分以上続けられる児童は6割であったことから、相手の話を言葉としてではなく音として認識してしまっている児童もいる。語彙力不足や読解力の課題が影響していると考え	5. 令和7年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項 【年度末に記入する】 - 語彙力を増やす。 - 短い文章を簡単に要約して伝える力を伸ばす。

6. 令和7年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿【年度末に記入する】

相手の話を聞いて理解し、自分の考えをもつことができる児童

【別紙2】

〈授業改善推進プラン 令和6年度第4学年 社会科〉

1. 『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現する上で解決すべき課題

- ・令和6年度村学力調査から、領域全体で全国平均を下回った。特に、「地域や市の様子」領域で9.7%、「市の様子の移り変わり」領域で17%全国平均から下回っている。そのため、身近な地域や自分たちの住む自治体についての興味関心を高め、知識を増やしたり、自分事として考えたりしていく態度を身に付ける必要がある。

2. 課題改善に向けた取組状況

(1) 令和4年度授業改善推進プラン記載内容

- ・教科書に載っている資料だけでなく、様々な統計資料や映像資料を活用し、読み取る練習をする。

(2) 今年度実践している『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現するための工夫等

【基礎基本が必要な児童】

- ・用語を確実におさえる。
- ・イラストや分かりやすい図、映像を資料として提示し、質問形式で読み取る。

【活用が必要な児童】

- ・教科書以外の資料からも情報を読み取る。
- ・既習事項や生活経験と関連付けて、考えられるようにする。

3. 課題の改善に向けた方策と検証方法

＜方策＞

- ①授業の始めにおさらいとして、既習の用語や内容をクイズ形式でおさらいする。
- ②資料から読み取った情報を、ノートやICT機器を用いて、図式化するなどして整理する。
- ③ICT機器を使い、スライドを作成し授業の中で活用する。またクラスルームに資料を載せて、読み取る学習を進める。

＜検証方法＞

- ①クイズへの回答やワークテストの知識理解の結果が8割以上か検証する。
- ②ノートやICT機器の記録で情報を関連付けてまとめられているか検証する。
- ③ノートなどの学習記録の進捗や達成状況を検証する。

4. 検証結果(成果と課題) 【年度末に記入する】

＜成果＞

授業初めのおさらいやクイズの結果、ワークテストの年間平均得点は9割以上になった。また、一年間の学習を通して、情報を読み取ってノートに分かりやすくまとめる力もついた。

＜課題＞

単元によっては身近さを感じづらい教材もあった。苦手な児童には、情報を限定的に渡したり、簡単な思考ツールを使わせたりと支援が必要だと考える。

5. 令和7年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項【年度末に記入する】

- ・小笠原だとかどうかという問いを投げかけ、身近なことからヒントを得て、考えられるようにする。
- ・適度な資料の情報量を児童に提供する。
- ・情報の整理の仕方の見本を提示する。

6. 令和7年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿【年度末に記入する】

自分たちの地域などの身近なことから、世界を広げて学んでいく児童

【別紙 2】

〈授業改善推進プラン 令和 6 年度第 4 学年 算数科〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現する上で解決すべき課題

- ・令和 6 年度学力調査では、概ねの単元が全国平均前後であったが、「図形領域」に課題が見られた。
- ・円の半径や直径など、算数用語の知識の定着が必要である。
- ・かけ算の筆算や分数など、数のきまりや仕組みを理解する力を付ける必要がある。
- ・図形の作図方法や、分度器、定規の正しい使い方を身に付ける必要がある。

2. 課題改善に向けた取組状況

(1) 令和 4 年度授業改善推進プラン記載内容

- ・課題把握の場面で、解決方法の見通しがもてるよう、毎回の導入場面で既習事項を振り返る。
- ・自力解決の場面で、自分の考えをノートに書く際に、「図」「式」「言葉」を活用し、説明できるようノート指導を行う。
- ・対話活動の際に、十分な話し合いが展開できるよう、意図したグルーピングを行う。

(2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現するための工夫等

【基礎基本が必要な児童への手立て】

- ・毎授業、前時のおさらいを丁寧に行う。「半径」や「底辺」など、算数用語に関しては、毎回その意味を確認する時間をとり、確実に理解・定着できるようにする。
- ・定規や分度器など、算数用具を正しく使えるよう、ICT 機器等を使いながら指導する。点と定規を確実にそろえたり、まっすぐ線をひいたりことを徹底する。

【活用が必要な児童への手立て】

- ・自力解決の時間を十分にとり、自分の考えたことをまとめて、自信をもって発表できるようにする。早く終わった児童の考えは教師がチェックすることで、自信をもって発表できるようにする。
- ・ペア学習を取り入れ、自分の考えが友達に伝わるように発表する力を付ける。

3. 課題の改善に向けた方策と検証方法

＜方策＞

- ①前時のおさらいと本時の振り返りを丁寧に行い、算数に関する「知識・技能」の定着を図る。
- ②友達との交流を通して、自分の考えたことを整理し、学習したことの理解を確かなものとする。

＜検証方法＞

- ①ワークテストの知識と技能面は、1 学期中に正答率 8 割を目指す。その後、10 月までに思考面も正答率 8 割を目標とする。
- ②毎時間の児童の振り返りから、わかったことや疑問点などをみとる。2 学期中には前述したことを自分の言葉でノートに書き表せるようにする。

4. 検証結果(成果と課題) 【年度末に記入する】

＜成果＞

自分の考えを、既習事項を基にノートにまとめることができる。またそれを基に友達と考えを交流させ、自分の考えを正確に伝えたり、友達の考えを基に自分の考えをよりよくすることができた。

＜課題＞

計算ミスなど、基礎的な学力には課題がある。

5. 令和 7 年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項 【年度末に記入する】

- ・話し合い活動や、学習の振り返りなど、自分の考えを表現したり、伝えたりする力は今後も高めていきたい。
- ・計算練習や作図、分度器の使い方等、技能面は反復練習を行い、向上させる。

6. 令和 7 年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿 【年度末に記入する】

友達と考えを交流させ、自分の考えをよりよくできる。

【別紙 2】

〈授業改善推進プラン 令和 6 年度第 4 学年 理科〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現する上で解決すべき課題 令和 6 年度村学力調査では、全体的に全校平均と同程度であった。しかし、「物質・エネルギー」領域では、全国平均より 3% 下回った。特に「風やゴムの働き」で 9.8%、「磁石の性質」で 4.5% と全国平均を下回っている。そのため、科学的事象について、現象の起こる仕組みや性質の知識を定着させる必要がある。	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和 4 年度授業改善推進プラン記載内容 - 必要感をもたせるために、「なぜ？」を引き出す導入の工夫を行う。 - 予想と理由を分けて考えることで、「難しい」という考えをなくすようにする。 - 思考を整理するために、ノートに明確に自分の考えを書き表せるようにする。 (2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現するための工夫等 【基礎基本が必要な児童への手立て】 - 具体物を準備して、興味や関心を高めたり、実感を伴った理解を促したりできるようにする。 - ICT 機器を使った学習補充を行って理解を深めさせる。 【活用が必要な児童への手立て】 - 予想を考えるときに、既習事項や生活経験を根拠に考えられるようにする。 - 実験や観察の結果をもとに、問題と結び付けて結論を自分の言葉で考えられるようにする。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 ＜方策＞ ①授業の始めにおさらいとして、スライドを用意し、既習の用語や内容をクイズ形式でおさらいする。 ②問題を発見し、予想し、考察する主体的な問題解決学習を展開する。 ③ICT 機器を使って図や写真、動画などを見て調べたり、理解を深めたりできるよう授業の中で活用する。	＜検証方法＞ ①ノートやプレテスト、ワークテストの知識・理解で 8 割以上の結果になるか検証する。 ②ノートやワークシートの記録から検証する。 ③ノートの記録やプレテストの結果から検証する。
4. 検証結果(成果と課題) 【年度末に記入する】 ＜成果＞ 年間のワークテストの平均点は 89 点であった。問題解決型の学習の流れが定着した。 ＜課題＞ 生物分野においては、小笠原と日本の一般的な事象に違いがあるため、理解することが難しい児童が多かった。	5. 令和 7 年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項 【年度末に記入する】 - 既習の用語や事象を単元の間は、毎回おさらいしたことで、知識の定着を図れる。 - 生物分野では、写真や動画の資料を活用すると実感が持てる。
6. 令和 7 年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿 【年度末に記入する】 生活経験や既習事項をもとに科学的事象について疑問を持ち、考えられる児童	

【別紙 2】

〈授業改善推進プラン 令和 6 年度第 4 学年 音楽科〉

1. 『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現する上で解決すべき課題 ・個別の活動や一斉指導だけでは「わかった」「できた」という実感が少なく、学習意欲が向上しない傾向がある。 ・音楽科の学習では、児童の音楽活動と離れた個別の知識の習得や、技能の機械的な訓練に偏ってしまう傾向がある。音楽活動と関わらせながら知識や技能を習得することで「わかった」と実感したり、児童が主体的に学び、思考・判断・表現することで「できた」と感じたりすることができるようにする必要がある。 ・歌唱や器楽の技能の習得状況が十分な児童とそうでない児童の差が激しく、二極化している。 ・感じ取った曲想と音楽の構造を結びつけ、表現に生かしていくことが苦手な児童が多い。			
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和4年度授業改善推進プラン記載内容 ・絵譜などを用いて曲想の感じ取りを深めたり、それを生かした表現をしたりすることができるようにする。 ・一人ずつ歌ったり演奏したりし、技能の習得状況を把握して、必要に応じて個別指導を行う。 (2) 今年度実践している『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現するための工夫等 【基礎基本が必要な児童】 ・個別に表現の技能を見取る機会を適宜設け、学習内容の達成状況を把握するとともに、その場でフィードバックを行い、児童が達成度や学びの方向を理解できるようにする。 ・ICT 機器及び教材を用いて、自らの学習状況に合わせた学習の仕方を選択できるようにする。 【活用が必要な児童】 ・適宜範奏をして表現の工夫のヒントを示し、児童が表現のレパートリーを増やせるようにする。			
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 <table border="1"> <tr> <td> ＜方策＞ ①知覚したことと感受したことをワークシートに記述し、表現に生かせるようにする。単語例・文例での支援も行う。 ②範唱（範奏）と模唱（模奏）を繰り返す活動を増やし、演奏聴取をその後の指導に生かす。範唱（範奏）には ICT 機器も活用する。 </td><td> ＜検証方法＞ ①発言内容や記述内容を記録し、曲想の感じ取りや演奏の工夫を深めることができたか確かめる。7割の児童が曲想を捉え、表現に対する思いや意図をもてるようにする。 ②個別または少人数の演奏聴取によって児童の表現技能の達成度や課題を細かく記録し、指導を検証する。7割の児童が適切なリズムと音程で表現できることを目指す。 </td></tr> </table>		＜方策＞ ①知覚したことと感受したことをワークシートに記述し、表現に生かせるようにする。単語例・文例での支援も行う。 ②範唱（範奏）と模唱（模奏）を繰り返す活動を増やし、演奏聴取をその後の指導に生かす。範唱（範奏）には ICT 機器も活用する。	＜検証方法＞ ①発言内容や記述内容を記録し、曲想の感じ取りや演奏の工夫を深めることができたか確かめる。7割の児童が曲想を捉え、表現に対する思いや意図をもてるようにする。 ②個別または少人数の演奏聴取によって児童の表現技能の達成度や課題を細かく記録し、指導を検証する。7割の児童が適切なリズムと音程で表現できることを目指す。
＜方策＞ ①知覚したことと感受したことをワークシートに記述し、表現に生かせるようにする。単語例・文例での支援も行う。 ②範唱（範奏）と模唱（模奏）を繰り返す活動を増やし、演奏聴取をその後の指導に生かす。範唱（範奏）には ICT 機器も活用する。	＜検証方法＞ ①発言内容や記述内容を記録し、曲想の感じ取りや演奏の工夫を深めることができたか確かめる。7割の児童が曲想を捉え、表現に対する思いや意図をもてるようにする。 ②個別または少人数の演奏聴取によって児童の表現技能の達成度や課題を細かく記録し、指導を検証する。7割の児童が適切なリズムと音程で表現できることを目指す。		
4. 検証結果（成果と課題） 【年度末に記入する】 ＜成果＞ ・9割の児童が聴いた曲の曲想を自分なりの言葉で表すことができていた。 ・少人数での歌唱聴取は効果的であった。個別に到達度を把握し、その後の指導に生かすことができた。 ＜課題＞ ・正しい音高で歌うことに課題のある児童が多い。音高を捉えることと、意識した高さで歌う技能的側面のどちらに課題があるか見極める必要がある。	5. 令和7年度（次学年）の学習指導において特に留意すべき事項 【年度末に記入する】 ・曲想や歌詞の意味を捉える手段として、他教科と関連する教材を用いる、情景を身近な事象に置き換えるといった手立てが有効である。 ・捉えた曲想を表現に生かすため、様々な歌い方を試しながら、表現の幅を広げていく必要がある。		
6. 令和7年度（次学年）末に期待する児童（生徒）の姿 【年度末に記入する】 ・曲のよさや面白さを表現に生かし、曲にふさわしい表現をすることのできる児童。			

【別紙 2】

〈授業改善推進プラン 令和 6 年度第 4 学年 図画工作科〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現する上で解決すべき課題 ・ 4 年生は扱うことのできる材料や用具も広がり、多様な試みが見られるようになる。新しく目にする材料や道具との出会いを大切にしつつ、自分の思いにあった表し方を工夫できるよう、様々な試みを広げるなどして構想する力をつける。 ・ 様々な技法や表現方法を体験して、工夫して表現する力をさらに高める。 ・ 得意な発想方法だけではなく、様々なアイデアの出し方や表現の深め方があることを知り、さらに発想の広がりをもたせる。	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和 4 年度授業改善推進プラン記載内容 ・ 身に付けた技能を繰り返し使える機会を増やし、定着を図る。 ・ 工夫している児童の作品、様々な参考作品や考え方などを紹介する。 ・ 材料や道具などの使い方で工夫できるところや組み合わせでできることなどを確認する。 ・ アイデアスケッチ、ワークシートなどを活用してアイデアを広げる。 (2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現するための工夫等 ・ 材料や道具などの使い方を掲示や ICT 機器を活用して確認し、試せる場を設定する。 ・ 児童の作品紹介を紹介したり、題材のテーマ設定などを工夫したりして、様々なアイデアの出し方や表現の深め方にふれる。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 ＜方策＞ ① 掲示や ICT 機器を活用しての材料や道具の使い方や工夫の仕方の確認を行い、十分に試せる場を設定する。 ② 題材のテーマ設定などにかたよりがないように計画を立て、導入などでそのねらいをしっかりと伝える。 ＜検証方法＞ ① 児童や作品の観察。全児童が材料や道具を正しく扱え、どんな小さな工夫でも良いので自分なりの工夫をできるようにする。 1 学期に基本的な技能を観察し、以降支援が必要な児童には適宜支援を行っていく。 ② 児童や作品、ワークシートの観察。全児童が毎回の授業でねらいを理解し、様々なテーマ設定などにふれられるようにする。	
4. 検証結果(成果と課題) <u>【年度末に記入する】</u> ＜成果＞ ・ 基本的な材料や道具の扱い方を掲示や ICT を活用することにより正しく扱うことができていた。 ・ テーマにそって様々な工夫や発想をすることができていた。 ＜課題＞ ・ 総合的に材料や道具を扱える力をさらに伸ばしていく。	5. 令和 7 年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項 <u>【年度末に記入する】</u> ・ さらに基本的な材料や道具の扱い方の定着のために掲示や ICT などを活用して取り組んでいく。 ・ 限定的なテーマなどにしすぎて、児童の発想が制限されないようにする。
6. 令和 7 年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿 <u>【年度末に記入する】</u> 様々な技法や表現方法を活用して、工夫して表現できる児童。	

【別紙 2】

〈授業改善推進プラン 令和 6 年度第 4 学年 体育科〉

1. 『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現する上で解決すべき課題

- ・児童が基本的な動作や運動の技能を身に付けるために、運動の目的や方法を理解させるとともに、繰り返しの練習の時間を確保する必要がある。
- ・単に運動を行うだけでなく、児童が自分の動きを理解し、修正するためのフィードバックが求められる。
- ・授業では、運動に対する興味や意欲を持続させることが課題である。

2. 課題改善に向けた取組状況

（1）令和 4 年度授業改善推進プラン記載内容

- ・ICT 機器を活用し、参考になる映像と自分の動きを比較することで違いを具体的に見付けられるようにする。
- ・学習カードを用いて、自分の課題から次の学習のめあてを設定させるようにする。技の習得をしたり勝利したりするために効率的な方法を思考する過程を通じ、『わかる』ことの重要性を振り返り、実感させる。

（2）今年度実践している『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現するための工夫等

- ・児童が「わかる」だけでなく「できる」を実感するまでには時間がかかるため、途中で意欲を失わないよう、ゲーム形式や仲間との協力・競争など、楽しさを取り入れた指導を行っている。また、達成度に応じた褒める場面を設け、児童の自信を育てている。
- ・教師が個々の動きを観察し、具体的な改善点をフィードバックしている。また、児童自身が自分の運動を振り返り、改善点を見付けるための時間を設けている。

3. 課題の改善に向けた方策と検証方法

＜方策＞

- ①少し高度な技術も取り入れた運動メニューを用意し、児童の進度に合わせて個別にチャレンジできる内容を設定。グループごとの目標は、個人技と協力技の両方をバランスよく設定し、目標に向かって進む姿勢を育む。「器械運動」
- ②運動内容に応じた段階的な目標を設定し、達成感を持てるよう工夫する。フィードバックは具体的な改善点を伝え、自己評価の時間も取り入れることで、児童が自分の成長を自覚できるようにする。「器械運動、走・跳の運動」
- ③戦略性のあるゲームや役割分担を取り入れ、協力しながら目標を達成する体験を増やす。勝敗にこだわりすぎないよう、努力やチームワークを評価するシステムを強化し、児童のやる気を引き出す。「全領域」

＜検証方法＞

- ①児童の運動能力向上の変化を定期的に記録し、各児童が設定された目標を達成できたかを評価。また、授業後のアンケートを通じて児童の満足度や自己評価を収集。
- ②児童の成功体験の頻度と、それに対する自己評価を授業後のフィードバックシートで確認。さらに、定期的な技術テストやパフォーマンスの変化を観察。
- ③授業中の参加率や積極性の観察、アンケートや口頭でのフィードバックを通じて児童の意欲や楽しさを感じているかを評価。

4. 検証結果（成果と課題） 【年度末に記入する】

＜成果＞

- ・ICT 機器や学習カードを活用したことで、児童が自分の動きを客観的に振り返り、改善点を意識する機会が増えた。
- ・段階的な目標設定により、運動の習得過程が明確になり、児童が成功体験を積み重ねながら自信をつける姿が見られた。
- ・ゲーム形式や協力活動を取り入れたことで、児童が楽しみながら取り組み、意欲的に運動する姿勢が向上した。
- ・戦略的なゲームや役割分担を導入することで、協力しながら運動を行う経験が増え、チームワークの意識が高まった。

＜課題＞

- ・高度な技術に挑戦する児童と基本的な動作の習得に時間を要する児童の間で、進度の差が大きくなり、個別のサポートがさらに必要である。
- ・フィードバックの時間は確保したものの、児童が具体的な改善点を十分

5. 令和 7 年度（次学年）の学習指導において特に留意すべき事項 【年度末に記入する】

- ・運動能力の個人差に対応するため、児童ごとの目標をより柔軟に設定し、成功体験を積みやすい環境を整える。
- ・フィードバックをより具体的で分かりやすいものにし、児童自身が次の行動につなげやすいよう工夫する。
- ・運動の楽しさを継続して感じられるよう、協力活動をさらに充実させ、勝敗だけでなく過程を重視した評価方法を取り入れる。
- ・ICT 機器の活用をさらに発展させ、児童が自発的に自分の動きを振り返り、改善策を考えられるよう支援する。

に理解し、次の行動につなげるには更なる工夫が必要。 ・競争や勝敗にこだわりすぎる児童もあり、努力やチームワークをより重視した評価方法の工夫が求められる。 ・ICT 機器の活用は効果が見られたが、活用頻度や児童自身の振り返りの質を高めるための支援が必要。	
6. 令和7年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿【年度末に記入する】 ・自分の運動の成長を実感し、運動への意欲を持続けられるようになっている。 ・個々の課題を理解し、目標に向かって努力する姿勢を身につけている。 ・仲間と協力しながら運動を楽しみ、チームワークの大切さを理解している。 ・フィードバックを活用し、自ら動きを改善しようとする意識を持っている。 ・ICT 機器や学習カードを活用し、自分で振り返る習慣が身についている。	

【別紙2】

〈授業改善推進プラン 令和6年度第4学年 道徳科〉

1. 『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現する上で解決すべき課題 ・日常生活の中から、様々な場面や行動に価値づけを行い、柔軟な人間性を養えるようにする。	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和4年度授業改善推進プラン記載内容 ・身近な場面から気持ちや行動の意図を考えさせ、イメージしやすくする。 ・思考を整理するために、ワークシートを活用する。 (2) 今年度実践している『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現するための工夫等 ・授業の始めに、身近な場面や自分の経験をふり返り、価値項目への関心を高めるようにする。 ・ICT 機器を使って、友達の考えを共有し合い、共通点や相違点を見付け、価値に気付くやすいようにする。 ・イラストを用いて、場面を捉えやすいようにする。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 ＜方策＞ ①身近な出来事から気持ちを想像させる。 ②毎時間自分の考えを書く時間を必ず確保する。 ③ I C T機器を活用し、友達の考えと自分の考えを比べて、価値に気付くようにする。	＜検証方法＞ ①思考の流れが分かりやすい板書を意識し、記録した児童の考えから検証する。 ②感想にならないように、発問を工夫したうえで記入させ、ワークシートの記述から検証する。 ③ I C T機器の記録とワークシートの記述をもとに検証する。
4. 検証結果(成果と課題) 【年度末に記入する】 ＜成果＞ 身近な出来事から学習に入ると、より主体的に取り組む児童が多いことが分かった。	5. 令和7年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項【年度末に記入する】 ・ワークシートの型を決め、ICT を活用したことで、多様な意見や価値観にふれることができた。児童も

ICTで友達の考えを見られることで、共感・納得して自分の考えをもつことができる児童もいた。 <課題> 教材文の内容によっては、身近さを出すことが難しいこともある。 友達の考えを見ても、自分の考えを発信できない児童もいた。考えたことをどうアウトプットさせるかの支援が必要である。	自分の考えと比べて読んでいた。 ・
6. 令和7年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿【年度末に記入する】 自分の経験を振り返ったり想像したりして道徳的価値を高める児童	

【別紙2】

〈授業改善推進プラン 令和6年度第4学年 総合的な学習の時間〉

1. 『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現する上で解決すべき課題 ・小笠原ならではの文化や伝統に触れ、それらを継承していこうとする気持ちを養う。	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和4年度授業改善推進プラン記載内容 ・「目的意識」をもたせる。 ・学んだことを生かして、成果として発表（掲示）できる場面を設定する。 (2) 今年度実践している『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現するための工夫等 ・外部講師を活用し、現状を知ることで「課題意識」や「目的意識」をもって取り組めるようにする。 ・年間を通して、様々な発表形式を経験し、自分の学んだことをや考えをまとめ、発表できるようにする。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 <方策> ①学習意欲を高めるために、導入でゴールを決め、具体的な目標をもてるようにする。 ②学習したことを継承していくためにできることを考え、実行できるようにする。	<検証方法> ①ワークシートを活用し、ゴールまでにどのような計画で動くか考えさせ、毎時間振り返りを書くことで活動の成果と課題を見えるようにする。 ②外部機関とも連携しながら、学んだことを表現できるよう環境を整えていく。
4. 検証結果(成果と課題) 【年度末に記入する】 <成果> 初めから意欲は高いなかで、目標を持たせて学習を進めることで、目的から外れずに考えたり取り組んだりすることができた。	5. 令和7年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項【年度末に記入する】 ・外部講師への比重を減らし、教師主導で学習を進めていくように、打ち合わせ前にねらい、ゴール、進め方の計画をしっかりと立てておく。

<課題> 外部講師との打ち合わせを綿密に行う必要がある。学習の進め方だけでなく、学校側から、学習のねらいやゴールを提案し、そこに関連する形で外部講師を活用していくべきである。	・課題解決できるような学習の流れになるように、外部講師にも理解と協力を得る。
6. 令和7年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿【年度末に記入する】 小笠原の文化や自然に触れて、大事にしていくために考える児童	

【別紙2】

〈授業改善推進プラン 令和6年度第5学年 国語科〉

1. 「「分かる」から「できる」を体感する授業」を実現する上で解決すべき課題 令和6年度村学力調査から、全国平均を下回る結果であった。特に「書くこと」の領域では、全国平均よりも－27%と大きく下回った。また、「話すこと・聞くこと」は全国平均から－12.3%下回っていた。			
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和4年度授業改善推進プラン記載内容 - 日頃から辞書を引かせる習慣を身に付けさせる。時間をかけて漢字学習の徹底を図る。 - 自分の考えを説明したり書いたりする機会をさらに増やす。 (2) 今年度実践している『「わかる」から『できる』を体感する授業』を実現するための工夫等 【基礎基本が必要な児童への手立て】 - 作文指導を定期的に設け、書く機会を増やす。 - 漢字のミニテストや再テストを定期的実施して、定着を図る。 - 学習の感想や自分の意見などを交流して、質疑する機会を設ける。 【活用が必要な児童への手立て】 - 作文指導を定期的に設け、書く機会を増やすと共に、作文内に漢字を使う文字数を設定し、漢字の活用能力を伸ばす。 - 漢字のミニテストや再テストを定期的実施して、定着を図る。 - 多様なジャンルの読書にチャレンジさせ、読みの幅を広げる。			
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 <table><tr><td> ＜方策＞ ①漢字ドリルを用いた筆順や字形の指導、月に2回程度の漢字10問テストを実施する。学期に2回の50問テストでは100点をゴールにした再テストを繰り返し実施する。毎週作文による、作文指導及び漢字の活用を図る。 ②考えや意見を交流・質疑する話し合いの場を設定する。全校朝会における講話内容の要約カードに取り組む。 </td><td> ＜検証方法＞ ①漢字ドリルやテストの進捗や達成状況を学期ごとに検証し、70点以上を目指す。毎週作文の記録を学期ごとに検証し、漢字使用数50文字以上を目指す。 ②ノート記録や話し合いの様子、全校朝会要約カードの記録を通年実施・検証し、要約して書ける児童7割を目指す。 </td></tr></table>		＜方策＞ ①漢字ドリルを用いた筆順や字形の指導、月に2回程度の漢字10問テストを実施する。学期に2回の50問テストでは100点をゴールにした再テストを繰り返し実施する。毎週作文による、作文指導及び漢字の活用を図る。 ②考えや意見を交流・質疑する話し合いの場を設定する。全校朝会における講話内容の要約カードに取り組む。	＜検証方法＞ ①漢字ドリルやテストの進捗や達成状況を学期ごとに検証し、70点以上を目指す。毎週作文の記録を学期ごとに検証し、漢字使用数50文字以上を目指す。 ②ノート記録や話し合いの様子、全校朝会要約カードの記録を通年実施・検証し、要約して書ける児童7割を目指す。
＜方策＞ ①漢字ドリルを用いた筆順や字形の指導、月に2回程度の漢字10問テストを実施する。学期に2回の50問テストでは100点をゴールにした再テストを繰り返し実施する。毎週作文による、作文指導及び漢字の活用を図る。 ②考えや意見を交流・質疑する話し合いの場を設定する。全校朝会における講話内容の要約カードに取り組む。	＜検証方法＞ ①漢字ドリルやテストの進捗や達成状況を学期ごとに検証し、70点以上を目指す。毎週作文の記録を学期ごとに検証し、漢字使用数50文字以上を目指す。 ②ノート記録や話し合いの様子、全校朝会要約カードの記録を通年実施・検証し、要約して書ける児童7割を目指す。		
4. 検証結果(成果と課題) 【年度末に記入する】 ＜成果＞ 文章を書く力、漢字の活用能力が向上した。お互いで作文を読み合うことで、表現力や語彙力の学び合いにもつながった。 要点を押さえて話を聞く態度や力が伸びた。 ＜課題＞ 漢字の習熟はまだ不十分で、字形を揃えて丁寧に書くことに課題が見られる。	5. 令和7年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項 【年度末に記入する】 - 文章を書く際に習った漢字を使うこと。 - 感想が一律の表現にならないように指導すること。 - 友達の意見や考えを取り入れて、自分の考えをもてるようにすること。		
6. 令和7年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿 【年度末に記入する】 感じたり考えたりしたことを表現豊かに詳しく文章化できる児童			

【別紙 2】

〈授業改善推進プラン 令和 6 年度第 5 学年 社会科〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現する上で解決すべき課題 令和 6 年度村学力調査から、領域全般で全国平均を－19.4%と大きく下回っていた。特に「都道府県の様子」で－21.3%、「伝統と文化、先人の働き」で－22.4%下回っている。	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和 4 年度授業改善推進プラン記載内容 - 地図帳や教科書の活用機会を設ける。 - ノートや I C T 機器の活用方法を提示する。自分で調べまとめ解決する学習方法の定着を図る。 (2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現するための工夫等 【基礎基本が必要な児童への手立て】 - 単元の学習計画の見通しをもたせ、学び方を理解させるために、I C T 機器を効果的に授業の中で活用し、提示したり操作したりさせる。 【活用が必要な児童への手立て】 - 日本の国土の様子については、地図帳などの資料を活用しながら特徴を発見・解決する実践を行う。 - 地域ごとのくらしや産業の様子については、I C T 機器を使って現地の課題や特徴を調べ、工夫や努力について問題解決する実践を取り入れる。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 ＜方策＞ ① I C T 機器を使い、スライドを作成し授業の中で活用する。またクラスルームに資料を載せて、読み取る学習を進める。 ② くらしや産業の学習では、現地の努力や工夫に気付かせ、どのような成果と課題があるのか考えさせながら学習を進める。 ③ スキルタイムを使って、国土の様子や特徴などを調べて白地図に記入させることで、既習の学習内容を復習する時間を確保する。	＜検証方法＞ ① ノートなどの学習記録の進捗や達成状況を通年検証し、適切に予想やまとめが書ける児童 7 割を目指す。 ② ノートなどの学習記録や発言の状況を通年検証し、適切に記録した発言したりできる児童 7 割を目指す。 ③ プリントや白地図などの進捗や達成状況を単元の節目や学期末に実施・検証し、理解度 7 割を目指す。
4. 検証結果(成果と課題) 【年度末に記入する】 ＜成果＞ 現代日本の社会的な課題を知り、自分たちなりの意見や考えをもって課題解決できるようになってきた。 ＜課題＞ 内地のような社会科見学が難しい実情から、課題をイメージできず自分事としてとらえきれていない。	5. 令和 7 年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項 【年度末に記入する】 リモートの社会科見学などを積極的に取り入れ、現場の様子を見たり、働く人の話を聞いたりする機会を設ける。
6. 令和 7 年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿 【年度末に記入する】 社会的な事象に興味をもち、課題に目を向けて考えや意見がもてる児童	

【別紙 2】

〈授業改善推進プラン 令和 6 年度第 5 学年 算数科〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業を実現する上で解決すべき課題 - 令和 6 年度学力調査では、すべての領域において全国平均を下回っていた。中でも「変わり方調べ」と「折れ線グラフと表」に課題がある。 「変わり方調べ」における○や□を使った式の関係性や、「折れ線グラフと表」におけるグラフの目盛りの読み方など、基礎基本的な知識を身に付ける必要がある。 - 算数全般的において「主体的に学習に取り組む態度」の力を引き上げる必要がある。			
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和 4 年度授業改善推進プラン記載内容 - 授業のねらいにつながる既習内容を確認し、児童が主体的に自力解決できるようにする。 - 具体物や半具体物の操作を通して、図形の構成や計算の意義を感覚的に捉えられるようにする。 (2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業を実現するための工夫等 【基礎基本が必要な児童への手立て】 - 毎授業、前時のおさらいを丁寧に行う。授業のねらいにつながる既習内容を確認することで、児童の不安感を軽減し、主体的に自力解決できるようにする。 【活用が必要な児童への手立て】 - 数の概念や図形をより具体的にイメージしやすいよう、ICT 等を使って問題を可視化する。例えば、「小数」における文章問題では、数直線や線分図を使ってわかっていることや聞かれていることを整理する。また「面積」や「角の大きさ」の学習では具体物や半具体物の操作を通して、図形の構成や計算の意義を感覚的に捉えられるようにする。			
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 <table border="1"> <tr> <td> ＜方策＞ ①毎時間、授業の始めに既習内容の確認を行うことで、学習に対する不安感を軽減できるようにする。 ②自力解決の時間を十分にとるとともに、ヒントカードや ICT 教材などを使い、児童に自分の力で解けた実感をもたせられるよう支援する。 </td><td> ＜検証方法＞ ① 2 学期末までに、ワークテストの知識と技能（表面）において、それぞれ正答率 8 割を目標とする。8 割を獲得できるようになれば、基礎的な内容は概ね身についたと考えられる。 ②学習の振り返りを検証することで、学習に対する意欲や理解の具合を観察し、指導に反映させる。2 学期中に概ねの児童がポジティブな振り返りをできるようにする。 </td></tr> </table>		＜方策＞ ①毎時間、授業の始めに既習内容の確認を行うことで、学習に対する不安感を軽減できるようにする。 ②自力解決の時間を十分にとるとともに、ヒントカードや ICT 教材などを使い、児童に自分の力で解けた実感をもたせられるよう支援する。	＜検証方法＞ ① 2 学期末までに、ワークテストの知識と技能（表面）において、それぞれ正答率 8 割を目標とする。8 割を獲得できるようになれば、基礎的な内容は概ね身についたと考えられる。 ②学習の振り返りを検証することで、学習に対する意欲や理解の具合を観察し、指導に反映させる。2 学期中に概ねの児童がポジティブな振り返りをできるようにする。
＜方策＞ ①毎時間、授業の始めに既習内容の確認を行うことで、学習に対する不安感を軽減できるようにする。 ②自力解決の時間を十分にとるとともに、ヒントカードや ICT 教材などを使い、児童に自分の力で解けた実感をもたせられるよう支援する。	＜検証方法＞ ① 2 学期末までに、ワークテストの知識と技能（表面）において、それぞれ正答率 8 割を目標とする。8 割を獲得できるようになれば、基礎的な内容は概ね身についたと考えられる。 ②学習の振り返りを検証することで、学習に対する意欲や理解の具合を観察し、指導に反映させる。2 学期中に概ねの児童がポジティブな振り返りをできるようにする。		
4. 検証結果（成果と課題） 【年度末に記入する】 ＜成果＞ 問題に対して、既習事項をもとに解決方法を考え、自分なりに解放を考え、説明できるようになった。 ＜課題＞ 計算能力や作図の正確さ、公式の暗記など、基礎的・基本的な学力に課題がある。	5. 令和 7 年度（次学年）の学習指導において特に留意すべき事項 【年度末に記入する】 計算や作図など、技能面は反復練習を行い、		
6. 令和 7 年度（次学年）末に期待する児童（生徒）の姿 【年度末に記入する】 基礎学力が定着していること。			

【別紙2】

〈授業改善推進プラン 令和6年度第5学年 理科〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業を実現する上で解決すべき課題 令和6年度学力調査では、「思考・判断・表現」「主体的に取り組む態度」の領域が全国平均から－14%程度大きく下回っている。また、「電気のはたらき」は－31.8%下回っており、学習内容の定着が見られない。	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和4年度授業改善推進プラン記載内容 - 毎回の授業、ノート指導で理科における学び方、問題解決学習の習慣を図る。 - ICT機器を使って、視覚的に学習内容の確認を行う。 (2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業を実現するための工夫等 【基礎基本が必要な児童への手立て】 - 具体物を準備して、興味や関心を高めたり、実感を伴った理解を促したりできるようにする。 - ICT機器を使った学習補充を行って理解を深めさせる。 【活用が必要な児童への手立て】 - 問題解決学習を通して、特に予想や考察場面で生活経験や既習事項を根拠に考えられるようにする。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 ＜方策＞ ①問題を発見し、予想し、考察する主体的な問題解決学習を展開する。 ②単元末には学習内容を整理・復習できるようにまとめの学習カード書く時間を確保する。 ③具体物を調べたり、ICT機器を使って図や写真、動画などを見て調べたりして理解を深められるよう授業の中で活用する。	＜検証方法＞ ①ノートの「予想」や「考察」、「まとめ」などから進捗や達成状況を通年検証し、学習に進んで臨む児童7割以上を目指す。 ②単元末に学習カードの達成状況を検証し、理解度7割以上を目指す。 ③ノートやプレテストの進捗や達成状況を検証し、理解度7割以上を目指す。
4. 検証結果(成果と課題) 【年度末に記入する】 ＜成果＞ グループによる予想、実験、話し合いの様子が意欲的、活発になった。問題を主体的にとらえて解決に向けて学習できるようになってきた。 ＜課題＞ 個別に予想・考察場面で文章化が難しい児童いる。	5. 令和7年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項【年度末に記入する】 ・友達の意見や考えを参考にして、深められるような場を意図的にもたせること。 ・イメージ図を用いるなど、考えを文章化することが難しい児童も発信できる工夫をすること。
6. 令和7年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿【年度末に記入する】 ・問題を見出し、主体的に問題解決するための予想や考察がしっかり表現できる児童	

【別紙 2】

〈授業改善推進プラン 令和 6 年度第 5 学年 音楽科〉

1. 『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現する上で解決すべき課題

- ・個別の活動や一斉指導だけでは「わかった」「できた」という実感が少なく、学習意欲が向上しない傾向がある。
- ・音楽科の学習では、児童の音楽活動と離れた個別の知識の習得や、技能の機械的な訓練に偏ってしまう傾向がある。音楽活動と関わらせながら知識や技能を習得することで「わかった」と実感したり、児童が主体的に学び、思考・判断・表現することで「できた」と感じたりすることができるようにする必要がある。
- ・既習の楽典知識、拍感覚の技能、歌唱の技能が十分に定着していない児童が多く見られる。一方で学習内容の発展により個別の楽器を演奏する機会も多く、全体指導が難しくなっている。
- ・「主体的に学習に取り組む態度」の力が低く、児童の関心や意欲を生かして学習を進める必要がある。

2. 課題改善に向けた取組状況

(1) 令和 4 年度授業改善推進プラン記載内容

- ・絵譜などを用いて曲想の感じ取りを深めたり、それを生かした表現をしたりすることができるようにする。
- ・一人ずつ歌ったり演奏したりし、技能の習得状況を把握して、必要に応じて個別指導を行う。

(2) 今年度実践している『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現するための工夫等

【基礎基本が必要な児童】

- ・個別に表現の技能を見取る機会を適宜設け、学習内容の達成状況を把握するとともに、その場でフィードバックを行い、児童が達成度や学びの方向を理解できるようにする。
- ・ICT 機器及び教材を用いて、自らの学習状況に合わせた学習の仕方を選択できるようにする。

【活用が必要な児童】

- ・児童の関心や意欲を引き出す教材選定を行い、短いフレーズの合奏など達成感を味わえる場面を増やす。

3. 課題の改善に向けた方策と検証方法

＜方策＞

- ①歌唱や器楽に必要な基礎的な知識・技能の定着を図る。ICT 機器及び教材の活用や、楽譜を見て学ぶ学習を通して、指導と記録をする。
- ②範唱（範奏）と模唱（模奏）を繰り返す活動を増やし、演奏聴取をその後の指導に生かす。範唱（範奏）には ICT 機器も活用し、自分の担当楽器や進度に合わせて学習方法を選択できるようにする。

＜検証方法＞

- ①一人一人の正答率や、行動観察・演奏聴取を通して、児童の変容を記録し、指導を検証する。適切な演奏法や読譜力の定着率は 7 割を目指す。
- ②個別または少人数の演奏聴取によって児童の表現技能の達成度や課題を細かく記録し、指導を検証する。7 割の児童が適切なリズムと音程で表現できることを目指す。

4. 検証結果（成果と課題）【年度末に記入する】

＜成果＞

- ・ICT 機器を用いて学習方法を選択することは効果的であった。8 割の児童が、正しいリズムや音程で器楽表現することができていた。

＜課題＞

- ・読譜能力に課題が見られた。音価や拍を認識することに課題がある。

5. 令和 7 年度（次学年）の学習指導において特に留意すべき事項【年度末に記入する】

- ・引き続き視聴覚資料を用いて器楽指導を行う。
- ・読譜力向上に資する、家庭学習で活用可能な教材を開発する。

6. 令和 7 年度（次学年）末に期待する児童（生徒）の姿【年度末に記入する】

表現の技能を得たり生かしたりしながら、表現の工夫を深めることのできる児童。

〈授業改善推進プラン 令和6年度第5学年 図画工作科〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現する上で解決すべき課題 ・5年生では学習経験が豊富になる。表したいことに適した材料や用具を選び、ひとつひとつの形や色の意味などを考えながら表し方を工夫するといったことができるようにする。 ・表したいものに合わせて材料や道具などの使い方のさらに工夫できるようにする。 ・自分で発想したり、考えたりするのが得意な児童が多いので、さらに自分の思いや気持ちを重ねて表現を深めることができるようにする。	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和4年度授業改善推進プラン記載内容 ・身に付けた技能を繰り返し使える機会を増やし、定着を図る。 ・工夫している児童の作品、様々な参考作品や考え方などを紹介する。 ・材料や道具などの使い方で工夫できるところや組み合わせでできることなどを確認する。 ・アイデアスケッチ、ワークシートなどを活用してアイデアを広げる。 (2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現するための工夫等 ・材料や道具などの使い方を掲示や ICT 機器を活用したり、工夫している児童の活動を紹介したりする。 ・自分の思いや気持ちを主体的に表すことを試せるような活動の場を設定する。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 ＜方策＞ ①掲示や ICT 機器を活用しての材料や道具の使い方や工夫している児童の作品を紹介して表し方の工夫のポイントをおさえる。 ②手や体を大きく動かす活動など、体全体の感覚を通して気持ちを開放しながら作品をつくるような場を設定する。	＜検証方法＞ ①児童や作品の観察。全児童が材料や道具を正しく扱え、どんな小さな工夫でも良いので自分なりの工夫をできるようにする。 1学期に基本的な技能を観察し、以降支援が必要な児童には適宜支援を行っていく。 ②児童や作品の観察。自分で発想したり、考えたり活動をした時に全児童がさらに表現の深まりを体験できるようにする。学期ごとに発想を問うような題材を実施し、発想が思い付かない児童には適宜支援を行っていく。
4. 検証結果(成果と課題) 【年度末に記入する】 ＜成果＞ ・基本的な材料や道具の扱い方を掲示や ICT を活用することにより正しく扱うことができていた。 ・手や体を大きく動かす活動など全体の感覚を通して行うような活動ができた。 ＜課題＞ ・自分の表したいものに合わせて様々な工夫や発想をさらにできるようにする。	5. 令和7年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項【年度末に記入する】 ・さらなる基本的な材料や道具の扱い方の定着のために掲示や ICT などを活用して取り組んでいく。 ・自分で発想したり、考えたりするのが得意な児童が多いので、さらに自分の思いや気持ちを重ねて表現を深めることができるようにする。
6. 令和7年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿【年度末に記入する】 自分の思いや気持ちを重ねて表現を深めることができる児童。	

【別紙 2】

〈授業改善推進プラン 令和6年度第5学年 家庭科〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現する上で解決すべき課題 ・家庭科の学習は、自分の生活に直結するものであるため、学習したことを生活の中で活用する力をさらに高める。 ・手縫いやミシン縫いによる目的に応じた縫い方の技能を定着させる。 ・学習した調理を生活の中でも活用できる技能を定着させる。	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和4年度授業改善推進プラン記載内容 ・家庭科は今年度からの学習のため、過去の記載はなし。 (2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現するための工夫等 ・写真や動画を活用してまずはわかる工夫をする。 ・ICT機器を活用して、繰り返し復習できるようにする。 ・練習時間を十分にとり、技能の定着を図る。 ・家庭でも実践できる課題を出し、生活の中で工夫して実践できるようにする。 ・話を聞く姿勢、コミュニケーションの取り方が身につくようにし、授業内の活動がよりよくなるようにする。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 ＜方策＞ ①手縫いやミシン縫いでは写真や動画で全体指導をした後に、クロームブックで自分のタイミングで動画を視聴できるようにする。 ②家庭で実践してくる宿題や長期休業中の課題に取り組ませ、生活の中で活用させる。 ③話を聞く姿勢、友達同士や教員と児童の間のコミュニケーションの取り方を毎時間伝える。掲示物で意識をよりもたせる。 ＜検証方法＞ ①作品の観察と技能テストを行う。児童が、手縫い・ミシン縫いの技能を正しく身に付けることができるようにする。シンを使用する題材が終わるまでに、ミシンのテストを行う。全員が合格できることを目標とする。 ②家庭で実践してくる宿題や長期休業中の課題の確認をする。学習したことを家庭で実践できているか、自分なりの工夫ができているかを確認する。長期休みに課題を出す。8割以上の生徒が家庭で学習を行うことを目標とする。 ③3月に、1年間の授業の振り返りシートに取り組み、自分の姿勢やコミュニケーションの取り方を振り返る。5割以上の生徒がよくなったと回答することを目標とする。	
4. 検証結果(成果と課題) 【年度末に記入する】 ＜成果＞ ・生活の中で活用させる課題についての取り組みはよくできていた。 ・基礎縫いについても定着してきている。 ＜課題＞ ・振り返りシートが実施できなかった。」	5. 令和7年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項【年度末に記入する】 ・授業規律を保ち、学習の定着を図る。 ・友達とのコミュニケーションの取り方を指導していく。 ・技能の定着をはかるため、ICT機器をより活用していく。
6. 令和7年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿【年度末に記入する】 学んだことを生活に生かしていこうとする児童。	

【別紙 2】

〈授業改善推進プラン 令和 6 年度第 5 学年 体育科〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現する上で解決すべき課題 ・知る、する、見る、支える、4つの観点で運動を楽しめるように、各領域において児童が「目的意識」をもって「必要感」を感じて学習していく必要がある。特に、チームでの協力が必要なボール運動領域において、ボールを持っていないときの動き方について、わかって、できる工夫をしていく必要がある。	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和 4 年度授業改善推進プラン記載内容 ・声を出して準備運動や整理運動をする。 ・学習の見通しをもち、振り返り時間を確保する。 ・ICT 機器を使用して、自分と他者の身体の動きを比較できるようにする。 (2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現するための工夫等 ・毎時間の振り返りを大切にする。 ・ICT 機器を活用し、自分やチームの動きを見える化する。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 ＜方策＞ ＜方策＞ ①ホワイトボードやICT 機器を使って、空間認知できるようにする。 ②準備運動及び感覚づくりの運動を充実させ、できることを増やしていく。 ＜検証方法＞ ① チームの課題を見付けたり解決したりするために、使用したいタイミングで使えるように環境を整備する。ネット型、ベースボール型、ゴール型と学習を計画し、年間を通して客観視するメリットを感じられるように、振り返りの時間等に適切な見方を指導していく。 ②ボール運動の準備運動では、その単元で高めたい基礎的な技能を時間内に取り入れる。また、単元中、帯でその運動を取り入れる。さらに、音楽を使用してリズム感をつけて、心と体をほぐせるようにする。全児童がゲームを成り立たせるうえで最低限必要な技能が身に付くようにする。	
4. 検証結果(成果と課題) 【年度末に記入する】 ＜成果＞ ゲームの合間やゲーム後など、多様な時間においてプレーを振り返る児童が多かった。ボードやICT の活用により視覚的に捉えることができた。 ＜課題＞ チーム及び個人のふりかえりを「毎回書くのか」「時間内にどう終わらせるか」が課題である。	5. 令和 7 年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項 【年度末に記入する】 ・ 学習課題やめあてを明確にして学習するために児童の思いをふりかえりや対話から見取りながら学習を一緒に作っていくことが必要である。
6. 令和 7 年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿 【年度末に記入する】 自分やチームの課題をもち解決に向けて仲間と協力しながら解決していける児童	

【別紙2】

〈授業改善推進プラン 令和6年度第5学年 外国語科〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現する上で解決すべき課題 ・児童によって学習意欲に差がでてきている。意欲が低い児童が50%程いる。 ・聞き取りや読み取りが苦手な児童が30%程いる。 ・ローマ字の読み、書きが苦手な児童が40%程いる。	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和4年度授業改善推進プラン記載内容 ・アクティビティを導入などで多く行い、英語に親しませ、意欲の向上を図る。 ・掲示物を工夫し、単元で重要な英文などは掲示して日常的に親しませる。 ・スキルタイム等でタイピング練習を行い、繰り返しローマ字入力をする。 (2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現するための工夫等 ・ICT教材の活用(カフトなど)により復習を繰り返し、既習学習を確実に定着させる。 ・掲示物を工夫し、単元で重要な英文などは掲示して日常的に親しませる。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 ＜方策＞ ①ICT教材の活用(カフトなど)を導入・復習で多く行い、英語に親しませ、意欲の向上を図る。 ②掲示物を工夫し、単元で重要な英文などは掲示して日常的に親しませる。 ＜検証方法＞ ①英会話に慣れ親しみ積極的に会話しているか取り組み状況を把握する。意欲的に取り組む児童を10%引き上げる。 ②ワークシートや教科書を活用して知識、技能の定着状況を把握する。平均を65点に引き上げる。	
4. 検証結果(成果と課題) 【年度末に記入する】 ＜成果＞ ・ICT教材(カフト等)を活用することで、児童がゲーム感覚で復習に取り組み、学習意欲の向上が見られた。特に、授業内での発話量が増加し、積極的に英語を使おうとする姿勢が育まれた。 ・掲示物を工夫したことで、英語に日常的に触れる機会が増え、単元の重要表現を自発的に口にする児童が増えた。 ・ワークシートや教科書を活用した学習の定着率が向上し、平均点が60点から65点に上昇した。 ＜課題＞ ・学習意欲の向上が見られたものの、依然として約40%の児童が受け身の姿勢で学習しており、さらなる工夫が必要である。 ・ローマ字の読み書きの苦手意識が依然として強く、スキルタイム以外にも日常的に活用する場面を増やす必要がある。 ・聞き取りや読み取りの苦手な児童に対する個別支援が不十分であり、多様な学習方法の導入が求められる。	5. 令和7年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項【年度末に記入する】 ・ICT教材の活用を継続しつつ、ペアワークやグループ活動を増やし、実際に英語を使う機会をさらに確保する。 ・ローマ字入力の練習機会を授業内外で増やし、タイピングや手書きをバランスよく取り入れる。 ・聞き取りや読み取りが苦手な児童に対し、音声教材や視覚支援を取り入れ、個別にアプローチできる指導法を検討する。 ・児童の学習意欲を高めるため、成功体験を積ませる仕組み(小テストの達成度評価、シールラリーなど)を導入する。
6. 令和7年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿【年度末に記入する】 ・英語のやり取りに対して抵抗感を持たず、自信をもって発話しようとする姿勢が身についている。 ・ローマ字の読み書きに慣れ、スムーズにタイピングや手書きができるようになっていく。 ・聞き取りや読み取りの基礎力が向上し、簡単な英文を自力で理解できるようになっている。 ・学習意欲の低かった児童も、英語を使うことに楽しさを感じ、積極的に取り組めるようになっていく。	

【別紙 2】

〈授業改善推進プラン 令和 6 年度第 5 学年 道徳科〉

1. 『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現する上で解決すべき課題 ・教材の内容が実生活とつながっていない児童が 3 割程度いる。 ・場面の課題を受けて、自分の考えやよりよい行動が適当に考えて書けない児童が 3 割程度いる。	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和 4 年度授業改善推進プラン記載内容 ・教材提示、板書を工夫しながら授業のねらいが視覚的にとらえられるようにする。 ・「なぜ」「どうして」「自分だったらどうするの」を問答しながら、みんなで考えていく。 (2) 今年度実践している『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現するための工夫等 ・ICT 機器やイラストを用意して場面を捉えやすくし、考えられるようにする。 ・実生活の課題から教材を作ったり、話題を実生活に置き換えたりして学習内容と生活課題を結び付けていく。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 ＜方策＞ ①人物の態度や表情、周囲の様子などが分かるよう ICT 機器を使ってイラストを提示して注視させることで、場面を捉えやすくし、自分の考えをもてるようにする。 ②実生活の課題から教材を作ったり、実生活に置き換えたりして課題と結び付け、自分事として考えられるようにする。	＜検証方法＞ ①ワークシートの記入状況や発言の様子などで検証する。 ②ワークシートの記入状況や発言の様子などで検証する。
4. 検証結果(成果と課題) <u>【年度末に記入する】</u> ＜成果＞ ICT 機器やイラストを用いたり、身近な話題に置き換えたりすることで場面の様子をイメージしやすくし、道徳的な心情を深めて考えることができた。 ＜課題＞ 発言者に偏りが多く、友達の意見や考えに流される児童がいた。	5. 令和 7 年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項 <u>【年度末に記入する】</u> ・道徳的価値に気付き、判断・行動できる実践態度を養っていくために、身近な事柄を教材化するなどして研究を深めていく。
6. 令和 7 年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿 <u>【年度末に記入する】</u> ・自分の考えに対する根拠をもち、他者の意見にも耳を傾けることができる児童	

【別紙2】

〈授業改善推進プラン 令和6年度第5学年 総合的な学習の時間〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現する上で解決すべき課題 ・ウミガメについての知識を知る時間が長く、児童主体の問題解決学習になっていない。	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和4年度授業改善推進プラン記載内容 ・アオウミガメに関心をもてるように外部講師を招聘したり、実際に触れ合ったりしながら知識を高める。 ・学習の振り返りを学習ごとに行う。 (2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現するための工夫等 ・カリキュラムの再編成により、1学期はウミガメについての知識理解を体験を通して行い、2学期をウミガメの生態学習と課題発見、課題解決にバランスよく取り組ませる。3学期に発表する。 ・意欲を持続させるために、身近なウミガメを更に身近に感じさせるように体験学習の回数を可能な範囲で維持する。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 ＜方策＞ ①児童が課題を見付けられるように授業を組み立て、課題解決を自主的に行えるように意欲喚起を行う。 ②体験活動によりウミガメを身近に感じさせ、更に意欲が増すようにする。	＜検証方法＞ ①ワークシートの記入状況や発言の様子などで検証する。 ②ワークシートの記入状況や発言の様子などで検証する。
4. 検証結果(成果と課題) <u>【年度末に記入する】</u> ＜成果＞ ・1学期に知識を深め、2学期に課題発見・解決へとつながる流れが、児童の主体的な学びを促す形となった。 ・体験活動を維持したことで、児童がウミガメに対する関心を継続し、学習意欲が高まった。 ・発表活動を通じて、学習の成果をアウトプットし、他者に伝える力が向上した。 ＜課題＞ ・児童によって課題発見の深さに差があり、自主的に取り組む児童と受け身の児童の間に差が生じた。 ・体験活動が多いことで満足し、学習の振り返りが十分にできない場面があった。 ・発表に向けたまとめの段階で、調べたことを整理し、伝える力を育むための支援が必要であった。	5. 令和7年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項 <u>【年度末に記入する】</u> ・児童が主体的に課題を見つけ、探究する時間を確保するために、知識習得と課題発見のバランスを再調整する。 ・体験活動後に、学びを深めるための振り返りの時間を意識的に設ける。 ・児童同士の意見交換の機会を増やし、多様な視点を持つことで、より深い課題発見や解決策の考案につなげる。 ・発表活動に向けた情報整理の指導を強化し、論理的に伝える力を育む。
6. 令和7年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿 <u>【年度末に記入する】</u> ・自ら課題を発見し、探究しようとする姿勢を持っている。 ・体験活動を通じた学びを深め、考えを整理し、言葉や資料で他者に伝えることができる。 ・学習を通じて得た知識や経験を、生活の中で活かし、持続可能な社会の一員として行動できる。	

【別紙 2】

〈授業改善推進プラン 令和 6 年度第 6 学年 国語科〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現する上で解決すべき課題 令和 6 年度村学力調査から、全国平均を下回る結果であった。特に「漢字の読み」領域では、全国平均から 26.2% 下回った。また、「話すこと・聞くこと」は全国平均から -10.9% 下回っていた。そのため、漢字を読み書きする力や聞いたことを理解し、自分の言葉で話す力を高めていく必要がある。	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和 4 年度授業改善推進プラン記載内容 - 既習学習の内容を復習する時間を、スキルタイムに確保し、前学年の内容も振り返り学習を進める。 - グラフなどの資料を読み取る力を身に付けるために、資料からどんな情報を得られるか全体で確認、共有し、自分の考えをまとめるようにする。 - 自分の意見をもたせるために、朝の会でニュースから思った自分の意見を発表する。 (2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現するための工夫等 【基礎基本が必要な児童への手立て】 - 漢字に対する苦手意識をなくすための一斉指導からの脱却を図り、個別対応する。漢字が読めて書けることで、国語学習に対して意欲的に学べるようにする。また、音読を正しくできるように読み物教材のときに読むときのポイントを伝える。 【活用が必要な児童への手立て】 - 説明文及び物語文でクローズではなくオープンな問いを増やす。「How」や「Why」を考えることで背景を考え、自分の言葉で整理することで、語彙力・思考力・表現力身に付くようにしていく。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 ＜方策＞ ①漢字ドリルの進め方を一斉一律で指導するのではなく、自分の進度で進められるようにした。小テストも複数枚印刷し、自分のペースで取り組めるようにした。 ②全校朝会等の要約したり、朝の会でスピーチの時間を設けたり、継続的な日記指導を行うようにした。	＜検証方法＞ ①新学期が始まって 2 か月以内に漢字ドリルを全員終了できるように調整する。終わった児童から漢字小テストに取り組み、1 1 月中に抜き打ちで行い成果を確認する。 ②スピーチは、テーマをいくつか提示し、全体で話す機会を月に 1 度は設ける。日記指導では、週に一度以上宿題として出し、ニュースに対する意見文などを書かせることで、自分の意見を表現できるようにする。
4. 検証結果(成果と課題) 【年度末に記入する】 ＜成果＞ 漢字ドリルの進め方や宿題の取り組みが効果として現れた。学年末のまとめテストでは 9 割の児童が 6 年生の漢字を 9 割以上とれていた。また、日記や文章を書く際に漢字を使うこともできた。 ＜課題＞ スピーチのテーマに悩む児童がいた。候補をいくつか用意し選択できるようにする必要がある。	5. 令和 7 年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項【年度末に記入する】 - 個別に支援が必要な児童には、意欲が減退しないよう、部首だけはあらかじめ書いておくなどの対策が必要である。 - 人前で話す経験があればあるほど、国語の授業のスピーチや卒業式での一言の際に堂々と話せることにつながっていく。
6. 令和 7 年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿【年度末に記入する】 自分の考えや思いを話したり書いたりして伝えることのできる児童	

【別紙 2】

〈授業改善推進プラン 令和 6 年度第 6 学年 社会科〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現する上で解決すべき課題 令和 6 年度村学力調査から、領域全般で全国平均を－9.8%と大きく下回っていた。特に活用能力に課題が見られ、「思考・判断・表現」、「活用」は、－14%程度大きく下回っている。中でも「日本の国土と人々の暮らし」の問題内容において課題が見られるので、復習時間を設けるなどして解決していく必要がある。	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和 4 年度授業改善推進プラン記載内容 - 単元の学習計画の見通しをもたせ、学び方を理解させるために、効果的に ICT 機器を利活用した資料作成を行い、導入時で提示する。 - 歴史領域において、年号と事象を覚えさせるのではなく、歴史的背景を理解させる学習内容とする。 (2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現するための工夫等 【基礎基本が必要な児童への手立て】 - 資料の提示の仕方を工夫し、興味・関心をもって読み取れるようにする。また、わかりやすいスライドを用意し、時代の流れがとらえやすいように工夫する。 【活用が必要な児童への手立て】 - 当時の立場で考えられる発問をすることで、当事者として歴史的事象をとらえる機会を増やす。同時に、現代から第三者として客観的にとらえる機会を設けることで、一つの出来事を多面的に見て判断する力をつけていく。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 ＜方策＞ ①ICT 機器による資料提示で興味を引き、情報を適切に調べ、まとめる技能を身に付けるようにする。 ②「もしあなたが〇〇の立場なら」という発問で、当時の状況や人物になり切って思考できるようにする。	＜検証方法＞ ①主に 6 月から 1 月頃まで続く歴史学習において、出てくる地域が現在でいうとどこかという視点を常にもち、日本の国土に関する知識を織り交ぜながら学習を進めることで、単元テストの知識が 8 割以上とれるようにする。 ②歴史上の主要人物が学習内容に出てくる際には、当時にどのような葛藤をしていたかを問い、議論することで、単元テストの記述欄で 8 割以上の児童が得点できるようにする。
4. 検証結果(成果と課題) <u>【年度末に記入する】</u> ＜成果＞ 当時の人物になって考えることや資料から読み取る時間を多くとったことで、単元テストの知識の部分で常に平均 9 割を超えた。 ＜課題＞ 時代の流れや背景を伝えるには教師が話すことも重要である。児童の活動時間との兼ね合いが難しかった。	5. 令和 7 年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項 <u>【年度末に記入する】</u> - 当時の人物になりきり、2 択で考えていくスタイルは児童にとって考えやすいといえる。 - 教科書の内容にプラスし、詳しい内容を伝えることでつながりを意識できるため、教材研究に時間をかける必要がある。
6. 令和 7 年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿 <u>【年度末に記入する】</u> 疑問をもとに、自ら調べ課題を解決していくことができる児童	

〈授業改善推進プラン 令和 6 年度第 6 学年 算数科〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現する上で解決すべき課題 - 令和 6 年度学力調査では、「小数の計算」と「面積」領域が全国平均を上回っていた。一方、他領域では全国平均を下回っており、特に「整数の仲間分け」「分数の計算」「比例・単位量あたりの大きさ」において課題が見られた。 - 算数全般的において「主体的に学習に取り組む態度」の力を引き上げる必要がある。 - 特に「変化と関係」領域について、基礎的な問題が正確に解ける力を付ける必要がある。	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和 4 年度授業改善推進プラン記載内容 - 授業のねらいにつながる既習内容を確認し、児童が主体的に自力解決できるようにする。 - 具体物や半具体物の操作を通して、図形の構成や計算の意義を感覚的に捉えられるようにする。 (2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現するための工夫等 【基礎基本が必要な児童への手立て】 - 毎授業、前時のおさらいを丁寧に行う。授業のねらいにつながる既習内容を確認することで、児童の不安感を軽減し、主体的に自力解決できるようにする。 【活用が必要な児童への手立て】 - 数の概念や図形をより具体的にイメージしやすいよう、ICT 等を使って問題を可視化する。例えば、「分数の計算」や「比」における文章問題では、数直線や線分図を使ってわかっていることや聞かれていることを整理する。また、図形の学習では具体物や半具体物の操作を通して、図形の構成や計算の意義を感覚的に捉えられるようにする。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 ＜方策＞ ①既習事項との繋がりを意識させることで、児童の不安感を軽減し、学習内容へのスムーズな導入を測る。児童の自作問題でおさらいをするなど、児童が主体的に取り組めるよう工夫する。 ②ペアやグループによる学習で、半具体物や図、言葉を使って説明しあうことで、児童全員が「わかる」「できる」を体験できるようにする。	＜検証方法＞ ①ワークテストの知識・技能・思考の 3 観点において、それぞれ正答率 8 割を目標とする。8 割を獲得できるようになれば、基礎的な内容は概ね身についたと考えられる。 ②2 学期末までに、自分の考えや、授業を通して分かったことなどをノートに書きあらわせるようにし、検証する。
4. 検証結果(成果と課題) 【年度末に記入する】 ＜成果＞ 問題の解法を、既習事項を基に考えたことをノートにまとめたり、友達と伝えあったり、高めあったりすることができた。 身の回りにある立体を見つけたり、グラフから読み取ったことを基に考察したことを、ノートにまとめ、発表したりすることができた。 ＜課題＞ 計算ミスや単位間違い、作図など、技能面には課題がある。	5. 令和 7 年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項【年度末に記入する】 - 常に自分の考えをもち、学習に臨む姿勢はこれからも継続してもらいたい。 - 計算力など、基礎的な学力は反復練習を行い、高められるようにする。
6. 令和 7 年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿【年度末に記入する】 問題に対して主体的に取り組む、自分なりの考えをもち続けていること。	

【別紙2】

〈授業改善推進プラン 令和6年度第6学年 理科〉

1. 『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現する上で解決すべき課題 令和6年度学力調査では、全国平均と比べて「知識・技能」は－13.3%、「思考・判断・表現」は－11.6%、「主体的に取り組む態度」は－13.0%と、どの領域も大きく下回っている。また、「人のたんじょう」「ふりこのきまり」「けんび鏡の使い方」の学習内容の定着率が極めて低い。	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和4年度授業改善推進プラン記載内容 - 予想と理由を分けて考えさせる。 - 結果をもとに分かることをノートに記入し、単元の終わりには結論までまとめる。 (2) 今年度実践している『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現するための工夫等 【基礎基本が必要な児童への手立て】 - 具体物を準備して、興味や関心を高めたり、実感を伴った理解を促したりできるようにする。 - ICT機器を使った学習補充を行って理解を深めさせる。 【活用が必要な児童への手立て】 - 問題解決学習を通して、特に予想や考察場面で生活経験や既習事項を根拠に考えられるようにする。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 ＜方策＞ ①問題を発見し、予想し、考察する主体的な問題解決学習を展開する。 ②単元末には学習内容を整理・復習できるようにまとめの学習カード書く時間を確保する。 ③具体物を調べたり、ICT機器を使って図や写真、動画などを見て調べたり、理解を深めたりできるよう授業の中で活用する。	＜検証方法＞ ①ノートの「予想」や「考察」、「まとめ」などから進捗や達成状況を通年検証し、学習に進んで臨む児童7割以上を目指す。 ②単元末に学習カードの達成状況を検証し、理解度7割以上を目指す。 ③ノートやプレテストの進捗や達成状況を検証し、理解度7割以上を目指す。
4. 検証結果(成果と課題) 【年度末に記入する】 ＜成果＞ グループによる予想、実験、話し合いの様子が意欲的、活発になった。問題を主体的に捉えて解決に向けて学習できるようになった。 ＜課題＞ 理解が浅く、頭の中で事象を整理して、正しく文章化したり、認識したりできていない児童がいた。	5. 令和7年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項 【年度末に記入する】 ・友達の意見を参考にして、イメージ図などを使って考えを深められるような場を意図的にもたせること。 ・ICTを活用して実験の事象や結果を振り返ることができるように授業を工夫すること。
6. 令和7年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿 【年度末に記入する】 ・問題を見出し、主体的に問題解決するための予想や考察がしっかり表現できる児童	

〈授業改善推進プラン 令和6年度第6学年 音楽科〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業を実現する上で解決すべき課題

- ・個別の活動や一斉指導だけでは「わかった」「できた」という実感が少なく、学習意欲が向上しない傾向がある。
- ・音楽科の学習では、児童の音楽活動と離れた個別の知識の習得や、技能の機械的な訓練に偏ってしまう傾向がある。音楽活動と関わらせながら知識や技能を習得することで「わかった」と実感したり、児童が主体的に学び、思考・判断・表現することで「できた」と感じたりすることができるようにする必要がある。
- ・正確な音程で歌唱する技能に課題があり、適宜支援を要する児童が見られる。変声期が始まる時期であり、技能的・心理的配慮を要する。
- ・感じ取った曲想と音楽の構造を適切な言葉で表現し、またそれらにふさわしい歌唱及び器楽の表現を工夫していくことを苦手とする児童が見られる。特に言語能力について支援が必要である。

2. 課題改善に向けた取組状況

(1) 令和4年度授業改善推進プラン記載内容

- ・絵譜などを用いて曲想の感じ取りを深めたり、それを生かした表現をしたりすることができるようにする。
- ・一人ずつ歌ったり演奏したりし、技能の習得状況を把握して、必要に応じて個別指導を行う。

(2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業を実現するための工夫等

【基礎基本が必要な児童】

- ・個別に表現の技能を見取る機会を適宜設け、学習内容の達成状況を把握するとともに、その場でフィードバックを行い、児童が達成度や学びの方向を理解できるようにする。
- ・ICT 機器及び教材を用いて、自らの学習状況に合わせた学習の仕方を選択できるようにする。
- ・文例や単語例などを示し、適切な言葉で曲想や音楽の構造を表現できるようにするため支援を行う。

【活用が必要な児童】

- ・表現を録音して聴く活動を積極的に取り入れ、自らの音とその響きに対する意識を高める。

3. 課題の改善に向けた方策と検証方法

＜方策＞

- ①知覚したことと感受したことをワークシートに記述し、表現に生かせるようにする。単語例・文例での支援も行う。表現が思いや意図に沿ったものになっているか、録音で確かめる。
- ②範唱と模唱を繰り返す活動を増やし、演奏聴取をその後の指導に生かす。和声の響きを感じ取る活動を増やし、音高に対する意識を高める。

＜検証方法＞

- ①発言内容や記述内容を記録し、曲想の感じ取りや演奏の工夫を深めることができたか確かめる。9割の児童が曲想を捉え、ふさわしい表現に対する自分なりの思いや意図をもてるようにする。
- ②個別または少人数の演奏聴取によって児童の表現技能の達成度や課題を細かく記録し、指導を検証する。9割の児童が適切なリズムと音程で歌えることを目指す。

4. 検証結果(成果と課題) 【年度末に記入する】

＜成果＞

- ・知覚したことと感受したことを結び付けて、自分の言葉でよさや面白さを伝える力が身に付いた。

＜課題＞

- ・音高を意識して歌うことが難しい児童がいる。響きを意識して歌う意識づけが必要である。

5. 令和7年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項 【年度末に記入する】

- ・単語例や文例の支援は効果的であるため、継続する。
- ・頭声発声の定着が必要であるため、発声の感覚がつかめるように指導を工夫する。

6. 令和7年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿 【年度末に記入する】

- ・音楽活動や友達との関わりを通して、表現への思いや意図を深めたり広げたりすることのできる児童。

【別紙 2】

〈授業改善推進プラン 令和 6 年度第 6 学年 図画工作科〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現する上で解決すべき課題

- ・ 6 年生では、今までの学年で学んだ技術を総合的に生かした単元が多い。特に木工や版画などの分野ではより高度な技能や構想の力が必要になってくる。今まで学んできたことを応用しつつ表したいことに合わせて工夫できるようにする。
- ・ 表しいものに合わせて材料や道具などの使い方のさらに工夫できるようにする。
- ・ 自分で発想したり、考えたりするのが得意な児童が多いので、さらに自分の思いや気持ちを重ねて表現を深めることができるようにする。

2. 課題改善に向けた取組状況

(1) 令和 4 年度授業改善推進プラン記載内容

- ・ 身に付けた技能を繰り返し使える機会を増やし、定着を図る。
- ・ 工夫している児童の作品、様々な参考作品や考え方などを紹介する。
- ・ 材料や道具などの使い方で工夫できるところや組み合わせでできることなどを確認する。
- ・ アイデアスケッチ、ワークシートなどを活用してアイデアを広げる。

(2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現するための工夫等

- ・ 材料や道具などの使い方を掲示や ICT 機器を活用して確認する。
- ・ 児童と実際にその材料や道具で工夫できるところを確認し、実際に試すことのできる学習場面を設定する。

3. 課題の改善に向けた方策と検証方法

＜方策＞

- ① 掲示や ICT 機器を活用しての材料や道具の使い方や工夫の仕方の確認を行う。
- ② ワークシートを活用しての活動の手順を計画したり、アイデアを広げたりする。

＜検証方法＞

- ① 児童や作品の観察。全児童が材料や道具を正しく扱え、どんな小さな工夫でも良いので自分なりの工夫をできるようにする。新しい材料に触れ合う活動を通してどう使うか発想を働かせたり、2 学期では電動のこぎりやのこぎりといった前年までに学んだ道具を使用する題材を行う。技能を観察し、以降支援が必要な児童には適宜支援を行っていく。
- ② 児童や作品、ワークシートの観察。全児童がある程度の見通しを持ちながら、自分なりに計画やアイデアを実現できるようにする。計画や発想が思い付かない児童には適宜支援を行っていく。

4. 検証結果(成果と課題) 【年度末に記入する】

- ・ 基本的な材料や道具の扱い方を掲示や ICT を活用することにより正しく扱うことができていた。
- ・ ワークシートなどを活用することにより、アイデアを広げることができた。

＜課題＞

- ・ 道具や材料などを自分の表したものに合わせてさらに工夫する力を伸ばしたい。

5. 令和 7 年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項 【年度末に記入する】

- ・ さらに基本的な材料や道具の扱い方の定着のために掲示や ICT などを活用して取り組んでいく。
- ・ ワークシートがあることにより制限されてしまう時もあるので、題材などによってアプローチの方法を工夫する。

6. 令和 7 年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿 【年度末に記入する】

計画性や手順などを具多的に考えたり、アイデアを広げたり、工夫したりできる児童。

〈授業改善推進プラン 令和6年度第6学年 家庭科〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現する上で解決すべき課題 ・家庭科の学習は、自分の生活に直結するものであるため、学習したことを生活の中で活用する力をさらに高める。 ・ミシン縫いによる目的に応じた縫い方の技能を定着させる。 ・学習した調理を生活の中でも活用できる技能を定着させる。	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和4年度授業改善推進プラン記載内容 ・なし (2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現するための工夫等 ・写真や動画を活用してまずはわかる工夫をする。 ・ICT活用して、繰り返し復習できるようにする。 ・練習時間を十分にとり、技能の定着を図る。 ・進みの早い児童には別の課題や応用の課題を出し、さらに技能の定着を図る。 ・家庭でも実践できる課題を出し、生活の中で工夫して実践できるようにする。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 ＜方策＞ ①手縫いやミシン縫いでは写真や動画で全体指導をした後に、クロームブックで自分のタイミングで動画を視聴できるようにする。 ②家庭で実践してくる宿題や長期休業中の課題に取り組ませ、生活の中で活用できるようにする。 ③進みの早い児童には発展的な内容の課題を用意しておく。さらに“できた”を実感できるようにする。 ＜検証方法＞ ①作品の観察と技能テストを行う。児童がミシン縫いの技能を正しく身に付けることができるようにする。ミシンを使用する題材が終わるまでに、ミシンのテストを行う。全員が合格できることを目標とする。 ②家庭で実践してくる宿題や長期休業中の課題の確認をする。学習したことを家庭で実践できているか、自分なりの工夫ができているかを確認する。長期休みに課題を出す。全員が家庭で学習を行うことを目標とする。 ③題材の終わりに、題材の振り返りシートに取り組む。発展的な課題に取り組んだ児童ができた実感する記述をしているか、題材の終わりに確認をする。	
4. 検証結果(成果と課題) <u>【年度末に記入する】</u> ＜成果＞ ・地域の協力を得ることで、学習したことが自分の生活に結びつけられた。 ・家庭での実践に意欲的に取り組んでいた。 ＜課題＞ ・進みの早い生徒への対応は、題材ごとにばらつきがあった。より深められるような課題を用意したい。	5. 令和7年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項 <u>【年度末に記入する】</u> ・クロームブックをより活用し、学びにつなげるようにしていく。 ・家庭での実践課題により意欲的に取り組めるよう、お便りで家庭にも伝えていく。
6. 令和7年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿 <u>【年度末に記入する】</u> 意欲的に学習に取り組み、学んだことを家庭でも実践しようとする児童。	

【別紙2】

〈授業改善推進プラン 令和6年度第6学年 体育科〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現する上で解決すべき課題 ・知る、する、見る、支える、4つの観点で運動を楽しめるように、各領域において児童が「目的意識」をもって「必要感」を感じて学習していく必要がある。特に、チームでの協力が必要なボール運動領域において、ボールを持っていないときの動き方について、わかって、できる工夫をしていく必要がある。	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和4年度授業改善推進プラン記載内容 ・声を出して準備運動や整理運動をする。 ・学習の見通しをもち、振り返り時間を確保する。 ・ICT機器を使用して、自分と他者の身体の動きを比較できるようにする。 (2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業」を実現するための工夫等 ・毎時間の振り返りを大切にし、次々の学習の始まりに使用する。 ・ICT機器を活用し、自分やチームの動きを見える化することで、客観的に自分やチームの動きをとらえられるようにする。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 ＜方策＞ ①ホワイトボードやICT機器を使って、空間認知できるようにする。 ②準備運動及び感覚づくりの運動を充実させ、できることを増やしていく。 ＜検証方法＞ ① チームの課題を見付けたり解決したりするために、使用したいタイミングで使えるように環境を整備する。ネット型、ベースボール型、ゴール型と学習を計画し、年間を通して客観視するメリットを感じられるように、振り返りの時間等に適切な見方を指導していく。 ②ボール運動の準備運動では、その単元で高めたい基礎的な技能を時間内に取り入れる。また、単元中、帯でその運動を取り入れる。さらに、音楽を使用してリズム感をつけて、心と体をほぐせるようにする。全児童がゲームを成り立たせるうえで最低限必要な技能が身に付くようにする。	
4. 検証結果(成果と課題) <u>【年度末に記入する】</u> ＜成果＞ ゲームの合間やゲーム後など、多様な時間においてプレーを振り返る児童が多かった。ボードやICTの活用により視覚的に捉えることができた。 ＜課題＞ チーム及び個人のふりかえりを「毎回書くのか」「時間内にどう終わらせるか」が課題である。	5. 令和7年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項 <u>【年度末に記入する】</u> ・ 学習課題やめあてを明確にして学習するために児童の思いをふりかえりや対話から見取りながら学習を一緒に作っていくことが必要である。
6. 令和7年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿 <u>【年度末に記入する】</u> 自分やチームの課題をもち解決に向けて仲間と協力しながら解決していける児童	

〈授業改善推進プラン 令和 6 年度第 6 学年 外国語科〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現する上で解決すべき課題 ・児童によって学習意欲に差がでてきている。意欲が低い児童が 10%程いる。 ・聞き取りや読み取りが苦手な児童が 10%程いる。 ・ローマ字の読み、書きが苦手な児童が 10%程いる。							
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和 4 年度授業改善推進プラン記載内容 ・ジェスチャーを交えて、会話と連動させる。 ・スキルタイムを利用して、アルファベットの小文字・大文字の書字など基礎的学習内容の反復や、課題のある内容を復習する時間を確保する。 ・ICT 機器を使った学習補充を行う。 (2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現するための工夫等 ・ICT 教材の活用（カフトなど）により復習を繰り返し、既習学習を確実に定着させる。 ・掲示物を工夫し、単元で重要な英文などは掲示して日常的に親しませる。							
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 <table border="1"> <tr> <th>＜方策＞</th><th>＜検証方法＞</th></tr> <tr> <td>①ICT の活用(カフトなど)を導入・復習で多く行い、英語に親しませ、意欲の向上を図る。</td><td>①英会話に慣れ親しみ積極的に会話しているか取り組み状況を把握する。意欲的に取り組む児童を 10%引き上げる。</td></tr> <tr> <td>②掲示物を工夫し、単元で重要な英文などは掲示して日常的に親しませる。</td><td>②ワークシートや教科書を活用して知識、技能の定着状況を把握する。平均を 83 点から 88 点に引き上げる。</td></tr> </table>		＜方策＞	＜検証方法＞	①ICT の活用(カフトなど)を導入・復習で多く行い、英語に親しませ、意欲の向上を図る。	①英会話に慣れ親しみ積極的に会話しているか取り組み状況を把握する。意欲的に取り組む児童を 10%引き上げる。	②掲示物を工夫し、単元で重要な英文などは掲示して日常的に親しませる。	②ワークシートや教科書を活用して知識、技能の定着状況を把握する。平均を 83 点から 88 点に引き上げる。
＜方策＞	＜検証方法＞						
①ICT の活用(カフトなど)を導入・復習で多く行い、英語に親しませ、意欲の向上を図る。	①英会話に慣れ親しみ積極的に会話しているか取り組み状況を把握する。意欲的に取り組む児童を 10%引き上げる。						
②掲示物を工夫し、単元で重要な英文などは掲示して日常的に親しませる。	②ワークシートや教科書を活用して知識、技能の定着状況を把握する。平均を 83 点から 88 点に引き上げる。						
4. 検証結果(成果と課題) <u>【年度末に記入する】</u> ＜成果＞ ・ICT 教材(カフト等)を活用したことで、ゲーム感覚で学習できる環境が整い、意欲的に取り組む児童が増えた。 ・掲示物を工夫することで、日常的に英語に触れる機会が増え、単元の重要表現の定着が促進された。 ・英会話に対する抵抗感が減り、簡単なフレーズを積極的に話す児童が増加した。 ＜課題＞ ・意欲が低い児童の割合は減少したが、一部の児童は依然として英語学習に苦手意識を持っている。 ・聞き取りや読み取りが苦手な児童への支援が継続的に必要であり、個別対応の工夫が求められる。 ・単元ごとの重要表現を掲示するだけでなく、児童が主体的に活用できるような活動をさらに工夫する必要がある。 ・スキルタイムでの基礎学習の時間をより効果的に活用し、個別最適な学習機会を提供する必要がある。	5. 令和 7 年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項 <u>【年度末に記入する】</u> ・英語に苦手意識を持つ児童への支援を強化し、成功体験を積ませることで学習意欲を向上させる。 ・聞き取りや読み取りの苦手な児童に対し、視覚的・聴覚的支援を取り入れた教材を活用し、理解を深める。 ・掲示物の活用をさらに発展させ、児童自身が単語やフレーズを活用しながら学習できる環境を整える。 ・スキルタイムの活用を工夫し、児童の習熟度に応じた個別指導を充実させる。						
6. 令和 7 年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿 <u>【年度末に記入する】</u> ・英語学習に対して前向きに取り組み、積極的に英語を話そうとする姿勢が身についている。 ・聞き取りや読み取りの力が向上し、簡単な英語のやり取りが自信をもってできるようになっている。 ・ローマ字の読み書きに対する苦手意識が軽減され、スムーズに活用できるようになっている。 ・授業内外で英語に触れる機会を活かし、自ら学ぼうとする態度を育んでいる。							

【別紙2】

〈授業改善推進プラン 令和6年度第6学年 道徳科〉

1. 『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現する上で解決すべき課題 ・教材に入り込み、自分事として捉えて心情を多面的に読み取る。 ・最後は、自分の立場で考え、日常生活に生かせるようにする。	
2. 課題改善に向けた取組状況 (1) 令和4年度授業改善推進プラン記載内容 ・振り返りの際に、学習で学んだ内容をイラストに表すなどさせる。 ・実生活に置き換えた課題を話し合わせる時間を設ける。 (2) 今年度実践している『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現するための工夫等 ・導入と展開後段の発問をそろえ、変容が分かるようにする。 ・板書を工夫し、思考の流れが分かるようにする。	
3. 課題の改善に向けた方策と検証方法 ＜方策＞ ①「価値項目の意味」「物語の内容にまつわること」などを導入で扱うことで、価値項目や物語に対する児童の前提条件を全体でそろえることを心がける。 ②動作化や役割演技を必要に応じて取り入れることで、登場人物の気持ちを多面的にとらえられるようにする。	＜検証方法＞ ①年間を通して導入に力を入れ、開始5分の導入で児童が教材を読みたい気持ちを高められているか、教室の雰囲気で見とる。 ②動作化や役割演技を取り入れる前と後で、児童から多様な意見が出てきたかどうかで見とる。年間の中で主に、A・Bの価値項目で活用していく。
4. 検証結果（成果と課題）（年度末に記入する） ＜成果＞ 価値項目や教材に関する発問で始めたことで、児童の学習意欲を高めることができた。また、役割演技により登場人物の気持ちを多面的に捉えられた。 ＜課題＞ 導入に時間をかけすぎて、一番時間を使いところで時間がなくなることがあった。	5. 令和7年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項【年度末に記入する】 教材内の感情解釈から自分事として考えることに代わるときに、スムーズなつながりを意識して、授業として一本筋が通るように工夫していく必要がある。
6. 令和7年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿【年度末に記入する】 自分の意見を意欲的に発信し、他者の意見を受け止めて多様な価値観で物事を多角的に見ることができる児童	

【別紙2】

〈授業改善推進プラン 令和6年度第6学年 総合的な学習の時間〉

1. 『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現する上で解決すべき課題

- ・小笠原諸島の世界遺産としての価値について考える上で、学年を系統立てた学習であったと理解している児童が50%ほどと高くない。

2. 課題改善に向けた取組状況

(1) 令和4年度授業改善推進プラン記載内容

- ・外部講師の講義から課題を見付け、インターネットや本などで調べ学習を展開していく。
- ・学習の振り返りや進捗状況を授業の終わりに全体で共有する。

(2) 今年度実践している『『わかる』から『できる』を体感する授業』を実現するための工夫等

- ・外部講師の講義から、自分が調べたい学習課題を発見し、必要感をもって調べられるようにする。
- ・発表形式を自分で決めて、発表できるようにする。

3. 課題の改善に向けた方策と検証方法

＜方策＞

- ①新聞、スライド等、自分の学びをまとめる際に、相手や目的に応じて発表手段を選べるようにする。
また、誰とどのように行うかも児童が選択できるようにする。
- ②ゲストティーチャーを招き話を聞くことで、さらに学習意欲が増すようにする。

＜検証方法＞

- ①一番初めの学習計画を立てる段階で、まとめ方をどのようにしたらよいか全体で交流するときの発言で検証する。
- ②ワークシートの記入状況や発言の様子などで検証する。

4. 検証結果(成果と課題) 【年度末に記入する】

＜成果＞

見通しをもつことを大切にすることで、方向性を明確にしたうえで調べ学習に取り組むことができた。

ゲストティーチャーの協力により、児童が意欲的に学ぶことができた。

＜課題＞

タコノ葉の学習における調べ学習では、ネットや本に情報がのっていないので、行い方を工夫していく必要がある。

5. 令和7年度(次学年)の学習指導において特に留意すべき事項 【年度末に記入する】

- ・調べ学習としてまとめていくのは、アホウドリと世界遺産とし、タコノ葉は体験学習とするとよい。

6. 令和7年度(次学年)末に期待する児童(生徒)の姿 【年度末に記入する】

自分が調べたいテーマを決め、探求し、分かりやすくまとめていくことのできる児童